
奥津城（おくつき）

徳次郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

奥津城^{おくつき}

【Nコード】

N5130B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

片山一家は5年前に世田谷から埼玉県のとある新興住宅地へ越して来た。他より格安で購入した土地の裏には、古い墓地が広がっていた。墓地の入り口に在る古い立て札には「奥津城」と記してあった。ある日の朝、志穂はここに越して来てから初めて裏の墓地へ埋葬される光景を見た。しかし、その後起こる不可解な出来事。志穂は何処かで聞き覚えのある声を聞いた。

ブローグ 景色(1) (前書き)

消去法で、ジャンルはホラーにしました。あまり怖くないかもしれませんが…

奥津城(おくつき)

プロローグ 景色(1)

ヘッドライトの強い光が、少女を捕らえて白く光っていた。ハンドルを握る男の顔は狂気に満ちていた。

それは、男にとって一殺多生を成し遂げる為の、必死の形相だった。

歪んだ思考が、それを自分の中で正当化させていたのだ。

アクセルを踏む足には躊躇なく力が入る。いや、躊躇する余裕など、その男には無かったのだ。

暗闇にはエンジンの唸りだけが響き渡って、夜気を振るわせた。

その少女をこの世から抹殺する。

ささやかな自分の人生を、他人に壊されたくは無い。

彼女は初めからこの世に存在しなかったのだ。自分とは何の関わりも無く、全てはリセットされる。

男の思考は全てが自分に都合よく、自己中心的で、それ以外には働かなかった。

足を踏み外してしまった高い崖の上から、底なしの谷間へと、すでに転げ落ちている自分の人生に、彼は気付く事ができなかった。

少女はただひたすら、暗闇を切り裂くように走った。

走るのは苦手ではなかったが、こんなに緊迫した中で走った事はなかった。

心臓の激しい鼓動が、彼女の胸を早鐘のように叩いた。それは、走り出した為ではない。恐怖と緊張が、少女の心拍数を跳ね上げたのだ。

命をかけて走る時が、自分に訪れるとは思ってもいなかった。

後ろから、身体を突き抜ける光がアスファルトを照らし出して、そこに長く伸びる自分の影が、生命の危機を加速させている事を、彼女は充分に知っていた。

辺りは真っ暗で、自分が何処にいて、何処へ向かっているのかも

判らないまま、少女はただ全力で走るしかなかった。

人気の無い大通りの直線が続いている事は判っていた。

所々に設置された街路灯の光が、この直線道路がまだまだ続く事を示していた。

左側には、白いガードレールが長く伸びて、闇の中へ姿を消している。

この時点でガードレールに切れ間があったなら、少女は後ろから迫るヘッドライトから逃れる事が出来たかもしれない。

道路を横切って進路を変える余裕は無い。しかし、絶望的なほど長く続くガードレールは、何処までもその切れ間を見せなかった。

後ろから照射される光の先に、ようやくガードレールの切れ間が見えたとき、そこには辿り付けないだろうと、少女は思った。後ろから迫る光源と唸るエンジン音が、あまりにも近い事に気付いていたからだ。

生命が絶たれる瞬間、少女が口にしたのは親友の名前だった。

母親でもなく、父親でもない。

小さい頃から何時も一緒にいた、しかし何時の間にか離れ離れになってしまった親友。

全てを分かち合い、心から信頼した友達と過ごした過去が、一瞬で駆け巡り、彼女の心を通り抜けて行った。

しかし、少女の発したその声が、誰かの耳に届く事は無かった。

この時は、まだ……

景色（1）

小粒の細かい雨が、上空から止め処なく静かに降り続いていた。雨

音はほとんどしなかった。家中の雨樋を伝う水音が、沢のほとりのように微かに聞こえていた。

濡れ滴る庭の草木が何時もより深い緑色に陰り、窓から見る景色全てに暗い影を落としている。

厚い雲に覆われた空は真つ暗で、朝だと言うのに、既に夕方のように、こんな日はとにかく憂鬱で、学校に行くのも鬱陶しい。じめじめとした憂鬱な気配が、この家の後ろに広がる陰湿な景色の影響であることも、この家の住人は知っている。いや、それを思い出すと言った方がいいのかもしれない。

普段は気にならない、気にしないようにしているのだ。

しかし、お盆やお彼岸には線香の臭いが家の内外を取り巻き、こんな雨の日は、じめじめと湿った空気に溶け込んだ古い土の臭いが漂いだす。しかも、そのお彼岸が終わって間もないせいか、微かに線香の残り香も漂っている。

もちろん、全ての窓は締め切っている。それでも何処からともなく外の臭いは入り込んでくるものだ。

「雨が降っているから、今日は少し早めに出なさいよ」

母親の片山文江は、父が食べていった朝食の後片付けをしながら言った。

「はぁーい」

志穂はトーストを口に頬張って、コーヒーで流し込んだ。

「ほら、あんたも少しは急ぎなさい」

立ち上がった志穂は、隣でゆっくりと寛いでいる弟の浩志の背中を軽く叩いた。

「今日、一限目が休校なんだよ」

「うそばっか」

志穂は、今度は浩志の頭を軽く小突いた。

「本当だよ。電話してみれば」

浩志は少しだけ剥きになって言った。

高校一年生の彼は、時々こうやって学校をサボる為、本当だとし

てもなかなか信用してもらえないのだ。

志穂は一端二階へ上がり、洗面台でセミロングの茶色い髪をとかず。別に髪が茶色いからと言って彼女の素行がグレしているわけではない。高校生にもなると、何らかのカラーリングを髪の毛に施すのはごく当り前な事で、純粹に真っ黒いままの髪をしているのは生徒の半数くらいだろう。

志穂の通う高校は元々校則があまり厳しくなく、更に三年生ともなると、よっぽど酷い身形でなければ特に注意を受けないのだ。もちろん、志穂の茶色い髪も、ダークブラウンだから、薄暗い場所では黒髪に見えるほどだ。

二階にある洗面台には、志穂の使っているヘアムースや洗顔クリームなどが置いてあり、殆ど専用となっている。当然その場所は弟の浩志も使う為、彼のムースなども置いてあるが、何時も隅の方へ追いやられている。

洗面台の後ろには小さなトイレがあり、志穂が使用している時、浩志は洗面台に立つ事さえ許されない。

洗面台とトイレの間の壁には小さな窓がある。しかし、その窓は殆ど開けたことは無い。

窓を開けて外を眺めると、そこには大きな古い墓地が広がっているからだ。一階の同じ向きに在るキッチンの窓からはこの家の塀が見えるだけだが、二階部分には遮るものが無い為、墓地を一望する形になる。

片山志穂の一家がここに家を建てて越してきたのは五年前。もちろん、父とて、こんな立地を好きで選んだ訳ではないだろう。ただ、当時、新興住宅地だったこの辺り一帯も、それなりの値段で切り売りされた。そして、墓地に面した場所は、他の区画に比べ、坪単価が三分の二の値段だったらしい。

その分、建物にお金が掛けられると言う事で、父は即決したのだ。「なあに、こんなの、仏滅の結婚式が半額なのと同じさ。仏滅に式を挙げたからって、不幸になった家族も聞いたことがない」

父は笑って言った。

結婚式はその日だけの事だが、家の裏の墓地は毎日ずっと在り続ける。と言う事を判っていたのだろうか。

墓地は家から見て、縦に細長く、墓地に背中が面している家は全部で三軒。志穂の家の側道を通ってしばらく行ってから墓地の入り口がある。しかし、完全に後全てが面しているのは、この家だけなのだ。他の二軒は、墓地の周りがある、小さな林や池に遮られて、それほど間近に墓地を感じない。

何故か、この場所だけ、この家の直ぐ後ろまでお墓があるのだ。だから、お彼岸の時などは家の中まで線香臭くなってしまう。

東京の雨と言えば、アスファルトとコンクリートの湿った臭いがある。だからよけいに、雨の日に漂う古い土の黴たような臭いは、東京で育った志穂達には敏感に鼻孔を刺激した。

越して来たばかりの頃は、怖いもの見たさみたいなものもあり、弟と一緒に窓から眺めたり、時には墓地の中を探検したりした。

迷路のように入り組んだそこは、子供の好奇心を擽るには十分だった。

しかし、ある出来事以来、志穂は、墓地に入るところか、見る事さえしなくなつた。

景色 2

志穂は自分の部屋から鞆を取ってくると、階段を駆け下りて

「行つてきませす」

そう言つて、玄関を出た。

「あ、いけない」

後戻りして再び玄関のドアを開け、傘立てから自分の傘を抜き取ると、それを広げながら小走りに門を出た。

ここは、埼玉県の所沢から西武沿線で少し奥へ位置する場所だが、途中から出来た大通りに合わせて住宅地の開発がはじまったので、駅からは遠い。

最寄りの駅は、人間市駅だが、バスで十五分、道路が混んでいると三十分以上掛かる事もある。

そして、学校は駅に程近い場所に在る。

天気が良いと自転車で行く事もあるが、大抵はバスを使う。それは、学校が緩い坂の途中にある為、行きは下りで良いが帰りは上り坂になつてしまふ為だった。

雨の日は、鬱陶しい。と思いつつも、この黴たような古い土の臭いから開放される距離まで歩くと、志穂はホツとする。思わず深呼吸してしまうほどだ。

「今日は、雨だから遅れてるかな」

志穂はそう言つてバス停まで来た時、ちょうどバスが来た。何時もより五分早い。いや、このバスは本来一本前のバスなのだ。

つまり、現在バスは二十分ほどの遅れで運行されている。志穂は今までの経験から、だいたいそう言うことを読んで家を出るのだ。

この時間帯にバスに乗っている学生と言えば、殆どが志穂と同じ学校の生徒だ。ベージュのブレザーにワインレッドのチェックのスカートは意外と目立つ。男子はベージュのブレザーにグレーのスラックスだ。

「おはよう！」

バスに乗り込むと、何時もは会わないはずの里美が声を掛ける。彼女は何時も志穂よりも一本早いバスを使うのだ。

里美はクラスでも一番仲が良い友人だ。他にも数人、何でも話せるような友人はいるが、志穂は比較的彼女と行動を共にする事が多い。

志穂も一年生の頃は、毎朝里美と同じバスに乗っていたので、自然と仲が良くなったのだ。ところが、ある日寝坊をして、泣く泣く一本遅いバスに乗ったら、何とかギリギリに間に合う事を知って、それ以来、なかなか一本前のバスに乗れなくなってしまったと言っただ。

志穂は里美の横で吊革に捕まった。

「乗ってくると思ったよ」

里美は、志穂が雨の日は自分と同じバスに乗って来る事が判っていた。時々お互いの行動パターンが読めてしまうほど、二人は気が合うのだった。

「混んでるね」

志穂は小さく息をついた。

雨の日は、何時も自転車を利用する人もバスを使う為、非常に混雑する。しかも、隣の人の傘が、自分のスカートを濡らす事も少なく無く、それを含めて、志穂は雨の日が嫌いだった。

学校の前は駅に続く並木通りになっている。バス停から校門までほんの少しだけ歩く、この銀杏の並木道が、志穂は意外と好きだった。

片山一家は、志穂が中学二年生の時に東京の世田谷から埼玉県に引っ越して来た。

世田谷の中学校は校庭が狭く、陸上トラックが楕円ではなく、まん丸だった。もちろん百メートルの直線なんて取れはしない。

埼玉の中学に転校して、陸上トラックが一周三百メートルあると聞いて驚いたものだった。勿論、高校の校庭も広く、公式競技ので

奥津城（おくつき）

きる四百メートルトラックの横には野球部とサッカー部のグラウンドが別々に在る。

そして、正校門を入る際、並木の歩道を必ず通る。

世田谷で通った中学の通学路にも銀杏の並木通りが在って、志穂はこの並木道を通ると世田谷で暮らしていた頃の友達を思い出す。

記憶(1)

「来たよ」

「どうしよう、志穂」

「頑張つて、千絵」

銀杏並木が立ち並ぶ歩道の前方から一人の高校生がやって来る。

紺色のブレザーにグレーのズボンを履いている。

世田谷の中学校に通っていた志穂とその親友太田千絵は、下校途中の細い路地で彼を待ち伏せしていた。

「さあ、行つて」

志穂が千絵の背中を強く押す。石のように強張った千絵の体と両足は、強く押さなければ動きそうに無かった。

志穂に押された千絵は、トトトツ……と、路地から並木通りに出た。

そこには、ちょうど高校生の彼が立っていた。突然飛び出てきた千絵に、少し驚いている。

「あの……これ、読んでください」

千絵は、高校生の彼に向かって、手紙を差し出した。

今時………と、思うかもしれないが、メールアドレスも知らないのだから、最初はこういう手段しか思いつかなかったのだ。

もちろん、手紙には千絵自身のメールアドレスを書き込んだ。携帯は持っていなかったからパソコンのメールアドレスだった。

高校生の彼は、ただ驚いて立ち尽くしていたが、とりあえず千絵の差し出した手紙は受け取ってくれた。

しかし、十代の二、三歳の差は大きい。高校生から見た中学生は、子供そのものだった。

千絵はそのまま志穂の待つ路地へ戻り、二人は反対側の通りまで走った。

「やったあ!」

走りながら千絵が叫んだ。

「しっ、まだ彼に聞こえるよ」

志穂は駆け足のまま、千絵の身体を肘で軽くつついた。

高校生の彼は、ほぼ毎日この並木道ですれ違ふのだ。初めて見た時から千絵は心が惹かれ、足掛け半年、ついに心の内を明かした手紙と自分のメールアドレスを彼に渡した。

それは、志穂にとってもまるで自分の事のように喜ばしい事だった。

しかし、翌日千絵は学校に来なかった。

心配した志穂は、学校の帰りに彼女の家に寄った。

玄関でチャイムを鳴らす。

千絵の家も共働きの為、この時間もしも誰かいるとしたら千絵だけはずだ。

静まり返った気配が家の中から漂っている。

千絵、いないのかな…… 志穂がそう思っていると、ガチャリと玄関のドアが細く開いた。

思わず、志穂はその隙間を覗き込む。すると、ドアの向こうから覗くように顔を出す千絵とぶつかりそうになった。

「ひゃあ、びつくりした」

志穂は、ビクッと身体を後に引いて小さく叫んだ。

「あ……… 志穂。来てくれたの」

千絵は、力無く志穂を見つめて言った。

「どうしたの？風邪？」

「うん……… 失恋の病」

志穂はとりあえず千絵の部屋まで上がって、彼女の話聞いた。

「昨日の夜、瀬田さんからメールが来たの」

「瀬田？」

「あ、昨日の、高校生の彼。瀬田アキオさんて言うの」

千絵は、とりあえず二つのグラスにオレンジジュースをついで、一つを志穂に差し出した。

「彼、なんだって？」

「彼……」

千絵の目から涙が溢れてきた。

「ど、どうしたの？彼、なんだって？」

志穂は、慌てるように、彼女の涙の理由を尋ねた。理由が判らなければ、もらい泣きもしてあげられない。

「彼ね、彼女がいるんだって」

千絵がティッシュで涙を拭いながら言った。

なんともありがちな結末に、志穂は小さく溜息をついて肩をすくめた。

記憶(1)(後書き)

ホラーなのに、なんか、ほのぼのしてすみません…ちゃんと話はホラーの方へ進みます。

奥津城(おくつき)

記憶(2)

翌日は雨も上がって晴れ渡る秋の空が広がっていたが、九月も末になると、さすがに朝晩は肌寒い。

土曜日で学校が休みという事もあり、志穂は遅い時間に目が覚めた。本当はもう少し眠っていたかったが、何となく焼香の匂いで目が覚めたのだ。

着替えて部屋を出ると、廊下はいつそう香の匂いが立ち込めていた。

これは残り香などではない。誰かがお墓で線香を焚いているのだ。お彼岸はもう終わったはずだが。

ここへ引越して五年、裏手に新しいお墓が建った事は無い。

古い墓地の為、既に新しい墓を立てる場所が無いのだ。少なくとも志穂を含めこの家の住人はそう思っていた。

比較的端に近い場所のお墓は、今風の御影石の表面をつるつるに磨き上げた立派なものだが、内側に入るにしたがってその様子は古くなり、手で削ったような墓石も沢山ある。

もつと奥に入ると、ただの四角っぽい石に文字を彫っただけのお墓もあり、名前は風化して既に消えかけている。

奥の一画には無縁仏もあり、薄っすらと何かが書いてある文字は、全く読めない。

墓地は百メートルくらい続いていて、林の向こうには小さな神社があり、その周りには、幾つかの馬のお墓が在る。昔、馬場だった為なのだと言うが、江戸時代の話だそうだ。

神社の向こうは竹林になっていて、その先には古いお寺が在る。そのお寺も江戸時代から在るそうだが、お寺の住職は新型のベンツに乗っていた。

廊下に出た志穂は、階段の方へ向けた身体を一端止めた。

洗面台の横の窓が少し開いていたのだ。

誰が開けたんだろう……ここ三年くらいは、殆ど鍵さえ開けたことが無い。

あの晩、あの窓から見た光景は、思い出したくもなかったから。

そう、あの時は昨日のような小雨が降り続いていた。

彼女が中学三年生だった夏。蒸し暑く寝苦しい夜だった。

夜中に目が覚めた志穂は、トイレに行こうと起き上がり部屋を出た。

眠る直前までクーラーを効かせていた部屋とは違って、廊下に出た途端、ムツとした生温い空気が身体を吞込んだ。

ぼつぽつという、木の葉や雑草に水滴の当たる音が、外から聞こえていた。トイレの横の窓が少し開いていて、雨音に混じってぼそぼそと言う低い話し声が聞こえてきた為、志穂は思わず立ち止まった。

おもてから声が聞こえる。こんな夜中に。

志穂は細く開いた窓から外を覗いた。墓地の殆どが見えた。

この天気の中、まるで月明かりが差し込んでるように薄っすら青白い不思議な明るさの遠くに人影が見える。

それは一人ではない。四、五人はいる。墓地の中央よりも志穂の家から見て奥の方だ。

何だろっ……志穂は目を細めて見入った。

人影は白くぼやけた輪郭ではつきりとしなが、暗闇の中でもそれが人の形をしている事はわかった。軍服のようなモノを着ているようにも見える。

三人は志穂に背を向けるようにして一箇所固まっているが、何かは辺りを歩き回っている。

志穂は、その歩き回っている人影に注意がいった。

何かおかしい。動き回る人影を視線が追う。

何が変わるのだろう。どうも人が歩いているにしては不自然だ。いたい何が……

志穂はハツとした。

上下動が無い。そうだ、人が足を動かして歩く時、膝が曲がったり伸びたりする為に必ず頭が上下に揺れる。それが全くないのだ。だからおかしいのだ。

そう、スケボーやキックボードで移動していればあんな動きになるかもしれない。しかし、確かあの辺りは土と砂利のはずだ。

手前に連なる墓石の影で、歩き回る人影の腰から下は見えなかった。

こんな雨の降る真夜中に、いたい何をしているのか。志穂の好奇心は、開いた窓から目が離せなかった。

三人固まっていた場所に、さらに一人が近づいた。

真ん中の一人が両脇の二人に促される、と言うよりは無理やり跪かされた感じに見えた。そして、右側に立っていた一人が腰に手を当てると、鈍く光る長いものを素早く抜き取って上段に構えた。

「何？」志穂は、窓の隙間に頬が潰れるほどに顔を寄せた。

刀？軍人が刀を持っているの？

志穂は、前に歴史の教科書を見た、昔の軍人の写真を思い出した。軍服の腰に提げられた長い軍刀。昭和初期、いや大正か明治時代だろうか。

心臓が激しく胸を叩いていた。薄手のパジャマの、ボタンで留まった胸の合わせ目が、小刻みに振動しているのが判るほどだった。

次の瞬間、上段に構えた刀は両手で振り下ろされ、墓石の黒い影から少しだけ見えていた、跪いた人間の頭がポロリと落ちて消えた。「ヒッ！」

志穂は、息を呑み込むような小さな悲鳴を上げ、とっさに手で口を抑えた。

その時だった。一箇所に集まっていた中の一人が振り返って志穂を見た。いや、たまたまこちら側に頭が動いただけなのかもしれない。

い。しかし、確かに五十メートル以上離れた距離からじつと志穂を見つめたのだ。

彼女はとっさに窓から顔を離れた勢いで、後にひっくり返って尻餅をついた。

「痛っ」

振り返って志穂を見つめた顔は、右半分がぼろぼろに欠損していた。

光の加減でそう見えたのか。いや違う、だって、右目が無かった。ただの空洞で、真っ黒で、左の目だけがギラリとあたしを見つめた。アレは何？人ではない。

志穂は混乱する頭の中で自問自答した。

墓地をうろつく人間のようで、しかし人で無いモノ……

こつちを見た。顔を見られた……まさか、あの距離から細く開いた窓を覗いたあたしの顔が見えるわけが無い。

志穂の全身がガタガタと音をたてて震えた。下あごの震えが、力チ力チと歯を鳴らした。

もう一度確かめようか。いや、まだあの男がこちらを見ているかも知れない。

志穂は顔を窓から少し離して外の様子を覗いた。相変わらずパタパタと木々の葉を叩く雨音と、雨樋を伝った水が排水溝へ細く流れ込む音が聞こえる。

目を凝らす。が何も見えない。

さつきよりもずつと暗い、ただの闇が広がっているだけだ。墓石と草木の黒い陰が微かにみえる。

こんな暗闇で、さつきは人影がくつきりと見えた。いや、本当なら見えるはずがない。右目が在るか無いかなど見えるわけがないのだ。

志穂の額には冷たい汗が流れていた。

後になって考えた時、白い人影がどうして軍服を着ていると判ったのか？あの距離で話し声が聞こえるか？

奥津城（おくつき）

片目の無い事が見て判るだろうか？ 自分でもいろいろ疑問が湧いたが、とにかくそんな事があったから、志穂は一度も墓地へは足を踏み入れていないし、二階の窓から墓地を覗いた事も無く、鍵も掛けたままだった。

声

お経を読む坊さんの声が、独特の低い周波数で空気を震わせながら、開いた窓から入り込んでくる。

志穂はどうにも気が進まなかったが、あの窓を開けたままにはしておきたくない。そう思うと仕方なく窓辺に近づいた。

窓は二十センチくらい開いていて、墓地を覗くには十分だった。窓に手を掛けたちょうどその時、読経は止んで、思わず志穂は窓の下を覗いた。

すぐ下、家の裏手の隅に新しい墓石は建てられていた。

いつの間に建てたのだらう。新しいお墓を建てる場所なんて在ったかしら？

どうやら、生い茂る雑草の一部を排除して場所を作ったらしい。お坊さんを含め三人の後ろ姿が見え、墓石の横に造ってある小物入れのような場所に骨壺を収めている所だった。

志穂は、何故か背筋に悪寒が走って、ハッと窓から顔を遠ざけると急いで窓を閉めて、しっかりと鍵をかけた。

「ここにもまだ埋葬できる場所があったのね」

志穂が階段を下りてキッチンへ入ると、母の文江が言った。

「いままで一度も無かったよね」

志穂はトースターに食パンを差し込んだ。

「そうよね。てっきり満席だと思ってたわ」

文江は少しだけ笑って「お父さんも、ここなら近くていいわね」

冗談でお墓の話をするのは、皆、健康で元気な証拠である。

志穂は焼香の匂いを振り払うように、コーヒーを飲んだ。

トーストにマーガリンを塗りながら「浩志は？」

「まだ寝てるんじゃない。どうせ遅くまでゲームでしょ」

「お墓の前に住んでいて、よくゾンビのゲームができるもんね」

志穂は呆れ顔で呟きながら、トーストを齧った。

浩志は最近、ゾンビ退治の人気ゲームに夢中なのだ。

テーブルに乗せていた志穂の携帯電話が鳴った。着信は里美からだ。

「ああ、里美。なに？」

「これから買い物付き合わない？」

「うん。いいよ」

「じゃあ、人間駅に十二時ね」

里美はそう言って電話を切った。志穂は携帯をたたみながら、再びトーストを齧る。

「出かけるの？」

洗い物をしながら文江が言った。

「うん。里美と買い物」

「気を付けてね」

そう遠くへ行くわけでも無いし、車を運転するわけでもないのに、いちいちそう言う母に志穂は笑って

「判ってるって」

彼女はシャワーを浴びる為に浴室に入った。

髪の毛に焼香の匂いが着いていそう、シャンプーを手に取り、丹念に髪の毛を揉み解すように洗う。

髪の毛がお湯に濡れたせいか、再び香の匂いが浴室全体に広がって湯気と絡みあった。

「シホ……」

囁くような、消え入りそうな小さく細い声だった。

志穂は、一瞬髪を洗う手を止めた。

「お母さん？」

彼女は目を閉じたまま耳を澄ました。

シャワーのお湯が自分の身体に当たって弾けながら流れ落ち、排水溝へ流れ込む音しか聞こえない。

頭の上に乗った泡が額に滑り落ちて来て、鼻を伝った。

顔を両手で拭って、薄目を開けて浴室の入り口を見たが、扉の擦りガラスに人影は無い。再びシャンプーの泡が流れ落ちて来て目に入りそうだったので、彼女は慌てて目を閉じた。

志穂は手早くシャンプーを洗い流し、素早くリンスを済ませると、急ぐようにして浴室を出た。

目を閉じている事が不安でたまらなかったし、何時もはまったく気にも留めない浴室の閉ざされた空間が、無性に怖くなった。

志穂はＴシャツに頭を通しながらリビングへ行くと

「お母さん、今洗面所で呼んだ？」

見ると、母親はテレビを見ながらお茶を飲んでくつろいでいる。

「えっ、何？」

答えを聞かなくても、志穂にはわかった。

「うっん、何でもない」

駅と一体化した地元のステーションビルにも、いろいろ買い物できる店はあるが、彼女達は大抵所沢か新所沢まで出る。気分転換にもなるからだ。

新宿や池袋には滅多に行かないが、どうしても欲しいものや、行きたい所があれば、惜しまず遠征する。最寄りの駅ビルなら学校帰りに何時でも立ち寄れるのだ。

「どうしたの？」

新所沢駅に隣接するファッションビルの一画、輸入雑貨屋の中で里美が志穂に声を掛けた。

彼女は外国製の洗顔フォームを握ったまま、何かを考えているようだった。

「ん？あ、別に」

「それ、和美が使ったみたいだけど、高いだけで良くないらしいよ」里美が、志穂の掴んでいた商品を指して言った。志穂は小さく笑

ってソレを柵に戻した。

志穂は、浴室で聞いた声を思い出していた。彼女は、あの声に聞き覚えがあったのだ。

あれは、母の声じゃない……しかし、それなら誰の声だったのか、今はどうしても思い出せなかった。

頭の隅に追いやられたあの声の記憶は、なかなか引きずり出す事が出来なかった。

雑貨屋を出た二人は、少し遅い昼食を取った後、ショッピングビル内に入っている本屋へ立ち寄った。里美が探したい本があると言ったからだ。

志穂は、ぶらぶらと店内を歩いて時間を潰していた。

「片山」

若い男の声だった。

志穂は声のした方へ振り返って「あ、智也」

クラスメイトの仲村智也だった。

智也とは一年の頃からずっと同じクラスの為か、男子の中ではかなり親しい。

背がトビツキり高いわけでもなく、めちゃくちゃイケメンというわけでもないが、彼の笑った時にできる目尻のシワが、志穂はチョットだけ好きだった。

「一人？」

智也は片手をポケットに入れたまま訊いた。

「ううん。里美と一緒に。その辺にいますと思うけど」

「そっか」

「あんたは？」

「俺は一人さ」

二人は暫しの時間を潰すように、立ち話をしていった。智也は、一人でふらりと洋服を買いに来てここへ立ち寄ったらしい。

「あれ、仲村じゃん」

二人が振り向くと、里美が立っていた。

「よし」

智也は里美に軽く手を上げると、「じゃあ、俺行くから」
そう言っつて、一足先に本屋を出て行つた。

「本、在つた？」

「うん、無かつた。取り寄せだつて」

「取り寄せなら、近所で頼んだ方がいいよね」

二人は本屋を出ると、同じショッピングビル内に在るレディース
ショップが連ねるフロアーに行く為に、エスカレーターに乗つた。

訪問者（1）

その夜、志穂は何となく寝付けなかった。十二時過ぎにはベッドに入ったのだが、ウトウトはするものの、何故か眠りに入れないまま時間が過ぎた。

こんな事は滅多に無い。志穂はどちらかと言うと、寝付きがよく大して眠くなくても、夜、布団に入って眼を瞑っていれば何時の間にか眠ってしまうのが普通だった。

ベッドサイドの棚に在る目覚まし時計を見ると、深夜二時十分になるところだった。

静まり返った夜の空気だけが彼女を包んでいた。

普段寝ている時間に、目的も無く一人で起きているのは、非常に心細かった。

窓の外から微かに聞こえる虫の音が、何故かいつそう心細さに拍車をかける。

その時、誰かが階段を上ってくる足音が聞こえた。

浩志のやつ、今頃帰って来たのかしら。

足音は階段を上り切って一端止まったかと思うと、再び鳴り出して廊下を歩いていった。

志穂はハツとした。その足音は、スリッパにしてはゴツゴツと硬く、はつきりとしている。勿論素足なら、ほとんど足音はしない。しかし、この音は、まるで廊下を靴のまま歩いているようだった。その音は、

静まり返った廊下にはつきりと響いている。

階段を上ってくると、浩志の部屋が手前にある。足音は、そこを取り越して、志穂の部屋の前まで来て止まった。

ドアの向こうに物凄い気配がある。

普段、自分呼びに来た時の母や浩志にだって、こんな強い気配を感じた事はない。それとも、深夜の止まった空気が、その気配を

敏感に伝えるのだろうか。

志穂の身体は硬直していた。心臓の音だけが、自分の身体を通して耳の奥で鳴り響いていた。

何か、得体の知れない恐怖が彼女を襲い、ドアの外に向かって声を掛ける事ができなかった。

それは、穂のかに焼香の匂いが漂ってきたからだ、彼女自身判っていた。

志穂は、布団に包まったまま、ドアの向こうの気配をじっと見つめた。

ドアの向こうでは、じつと押し黙ったまま動く様子もない。

相変わらず耳の奥で鳴り響く心臓の鼓動だけが聞こえた。それはまるで、うさぎの心臓のように速く叩かれていた。

しばらく、いや、間も無くだろうか。志穂にはその時間が、どのくらいだったのか全く計り知れなかった。小一時間にも感じられなし、ほんの数秒だったのかもしれない。

ドアの向こうの気配は、再び廊下を歩いて遠ざかり、階段を下りて行った。

志穂は全身に冷たい汗を感じながら、腕の鳥肌を片一方の手で擦った。

朝目が覚めると、何も変わらない何時もの部屋の風景に、志穂は少しだけホツとした。

深夜の出来事は夢だったのだろうか。志穂は何時の間にか眠っていた為、記憶が混乱した。

「ねえ、浩志。昨日何時ごろ帰った？」

日曜にしても遅く起きた志穂は、珍しく先に朝食を食べていた弟の浩志に向かって訊いた。

「十二時半くらいかな。何で？」

浩志は不思議そうに応えた。

「そう。うん、別に……」

志穂は肯きながら、今度は文江に向かって

「お母さん、昨日のお墓に来た人達って、近所の人？」

「さあね、この辺の人なら、お葬式もやるから判ると思うんだけど」

「ここ数日、この周辺での葬儀は心当たりが無かった。」

「どうしたの？」

文江が怪訝な顔をしている。

「うん、別に……」そう言った後、志穂は少しだけ考える顔を見せて

「お母さん、昨夜あたしの部屋に来た？」

「行ってないわ」

「そう」

志穂は、やっぱり、と思いながら、トーストを齧った。

その時、玄関の呼び鈴が鳴った。

「あら、日曜日に誰かしら？」

三人は思わず顔を見合わせた。流しで立っている文江が玄関へ向かう。

「宗教の勧誘じゃないの」

母親の背中に向かって浩志が言った。

文江は直ぐに戻ってきた。

「コーヒーを片手に浩志が「何だった？」

「誰もいなかったわ」

文江はそう言って、流しで洗い物の続きをしながら「きっと、悪戯ね」

「お父さんは？」

「ゴルフ」

「またあ」

志穂はそう言ってカップのコーヒーを飲み干した。

「いいじゃん、別に」

と立ち上がって二階へ行くこととした浩志に向かって志穂は

奥津城（おくつき）

「あんだ、またゲーム」

訪問者(1)(後書き)

「おくつき」って何だ？って思う方がいるかもしれません……後半に出てきますので、お待ちください。辞書にも載っていますけどね。

訪問者(2)

志穂は午後から美容院へ行こうと決めていた。だいたい夜とかに急に髪を切りたくなって、一度そう思ったら我慢できずに翌日には切りに行く。

昨晚の奇妙な出来事は腑に落ちないが、とりあえず今日は髪を切ろうと決めていた。

彼女は玄関を出て、ふと足を止めた。

玄関のドアから出て直ぐのところに、小さなキーホルダーが落ちていた。

携帯ストラップではなく、少し古い、小さな青色をした熊の付いたキーホルダーだった。

志穂はつまんで拾い上げてみる。

テディーベアの類であろう、そのキーホルダーに付いた熊は、耳や肩の部分が少し磨り減っていた。

志穂は、それをじつと見つめた。何処かで見覚えがあったのだ。誰かが、同じものを着けていた気がする。何処で見たのだろう。

里美じゃないし、由美子でもない、玲子のはずはない。彼女もつと値の張るものしか身に着けない。と、いろいろ考えた。

それとも、今朝、チャイムを鳴らした人の落し物だろうか。自分の知り合いなら、何故、チャイムだけ鳴らしていなくなったのだろうか。

「ま、いいか」

志穂は呟きながら、とりあえずキーホルダーをポケットに入れて、自転車で美容院へ出かけた。

その夜は、十月に入ったと言うのに妙に蒸し暑くて、志穂の部屋の窓は開いていた。ガラス戸は開けているが、習慣で網戸は閉めている。

夏のような生温い風が窓から入り込んでいたが、昨晚少し寝不足のせいもあってか、志穂は普通に眠りについていてた。

しかし、真夜中にふと目が覚めた。部屋の中に焼香の匂いが漂っていた。志穂は窓が開いているせいだと思い、窓を閉めて再び布団に潜り込んだ。

そこで、ふと思った。

何故、この次期のこんな時間に線香の匂いがするのだろう。先日埋葬されたお墓に、誰かがお線香を上げに来ているのだろうか……こんな夜中に？

そう言えば、昨日も。

志穂は昨夜の出来事を思い出してしまった。

彼女は夜中に目が覚めると、何時もろくな事が無い。だから、今夜も妙な不安にかられていた。

時計を見ると、二時十分だった。嫌な予感がした。

自然と闇の静けさに耳を澄ます。やっぱり聞こえる虫の鳴き声。それがコオロギなのか鈴虫なのか志穂には判らなかつた。

すると、階段を上って来る足音が聞こえた。

まただ……志穂は、昨夜のあの足音だと直ぐに気付いた。

足音は階段を上り切って、廊下を歩いて近づいて来た。やはり、浩志の部屋を通り越し志穂の部屋の前で止まった。

志穂は布団の縁を強く掴んだ。

「だれ？」

彼女は普段出さないか細い声で言ったが、ドアの向こうには届きそうに無かつた。

「誰なの？」

志穂は再び、今度は普通に大きな声が出た。

大きいと言ってもそれは、学校で友達と騒いでいる時の声には遠

く及ばなかった。しかし、この時の精一杯の声だ。
そして、ベッドから起き上がり百科事典を一冊手に取り、ドアに近づいた。

木刀や金属バットのような手頃な武器が見つからなかった為、厚くて硬い事典を手に取ったのだ。これだって角で殴ればさうとう痛いし、相手がナイフを持っていても防御も出来る。志穂はそう考えた。

ドアの手前に立つと、その向こうには、まだ気配を感じた。

志穂は一息つくと思いついてドアノブを掴んだ。そのとたん、ドアノブが外から回されドアが押し開かれた。

「キヤツ」

意表をつかれて開いたドアに、志穂はビックリして、しかし、しっかりと事典を振りかぶった。

「俺だよ！」

「あ……」

ドアを開けたのは、弟の浩志だった。百科事典で殴られては敵わんと身構えている。

「何よ、あんた」

「何よじゃないよ。姉貴が何か叫んでいるのが聞こえたから見に来てやったのに」

「あんたね。悪戯してたのは」

「なんだよ、いきなり。俺だって寝てたんだぜ」

浩志は寝癖の付いた頭で不機嫌に言った。

志穂は浩志の足元に視線を落とす。と、彼は素足のままだった。

「今、階段上つて来たの、あんたじゃないの？」

「俺は、姉貴の声を聞いて、隣の部屋から来たんだよ」

「じゃあ、ここに誰かいなかった？」

「誰かって？」

「それを、訊いてるんじゃない」

志穂は少し苛立ちながら、重い事典を床に置いた。

「俺が部屋から出た時は誰もいなかったし、逃げていった気配も無かったぜ。それに、玄関の戸締りだってちゃんとしてあるだろ」

浩志は志穂を馬鹿にしたように笑うと

「外からは、誰も入れないよ」

志穂は、何がなんだか判らずに、釈然としなかった。

「頼むぜ、姉貴。寝ぼけるなら、静かにやってくれよ」

浩志はそう言いながら、頭をボリボリとかいて、隣にある自分の部屋に戻って行った。

志穂は浩志を無言で見送った後、ドアを閉めようとして、その動作を止めた。

廊下に何か落ちている。暗くてよく判らなかったが、拾い上げてみると昼間に玄関で拾ったものと同じ熊のキーホルダーだった。

志穂は、昼間に着ていた上着のポケットを探ってみた。

「無い……」

自分で廊下に落としてしまったのだろうか……

志穂にはどうも納得がいかなかったが、とりあえず明日、いや、もう今日だが、学校もあるのでキーホルダーは机の上に置き、そのままベッドに入って眠った。

彼女は気付かなかったが、部屋の中は、もう焼香の匂いはしていなかった。

学校

「片山、次の時間視聴覚室でヒヤリングのテストだから、準備頼む」
英語教師の柴田孝行が、教室のドアから顔を覗き入れて言った。

「え、また、あたしですか？」

里美と雑談していた志穂がパツと振り返って言った。

「今日、立川が休みでさ」

立川由美子はクラス委員だった。真面目で成績優秀、はつらつと元気も良い。そして、普段掛けている眼鏡を外すと、意外に可愛い事を志穂は知っている。

ただ、生理痛が重い体質らしく、毎月一日、二日は学校を休む。

男子のクラス委員もいるのだが、殆どの仕事は由美子が行っていて、彼女が休みだと、何故か志穂に仕事を頼む先生が多いのだ。

「しょうがない、あたしも手伝うよ」

一緒に雑談していた里美が言った。

おそらく先生は、志穂に頼めば、他の誰かも手伝ってくれる事を知っているのだ。

この学校の校舎は少し古い。志穂が入学した時は、白い外壁が薄茶色とねずみ色の混ざった、変な色に染まっていた。長年の汚れと日焼けによる変色だろう。

去年、全面的に色が塗り替えられ、外見は綺麗なクリーム色になった。そして、春に内装の補修が一部行われ、その時に一階の空き教室が視聴覚室になった。

英語教師の柴田は今年の春に他から赴任してきたのだが、一見ひ弱な外見と打って違って明るい楽しい先生だ。

耳に掛かるほどの髪に、緩くパーマをかけたその容姿は、細身の体型も相まって、実年齢よりも少し若く見えるかもしれない。

志穂は、職員室で柴田から受け取った教材を視聴覚室に運んだ。

「なんか、あたし一人で大丈夫だったね」

「いいじゃん、どうせ暇なんだし」

里美はそう言って、ヒヤリング用のテープを二本だけ手に持った。以前は教室にラジカセを持ち込んでヒヤリングをやったものだが、視聴覚室を使えば、個々の机に付属したヘッドホンから音声聞き取れる為、授業が進め易いのだ。

「由美子、何だって？」

教壇の上に教材をドサツとのせた志穂が、思い出したように里美に訊いた。

「風邪じゃない」

里美は視聴覚室の机に腰掛けて「帰りに、寄ってみる？」

「そうね」

音響システムのボタンをカチカチと悪戯しながら志穂が肯いた。

由美子の家のチャイムを鳴らすと、ドアを開けたのは四十歳過ぎの眼鏡をかけた細身の女性だった。

「あら、いらっしやい」

それが由美子の母親だ。

すでに何度か会った事があるのでお互いに知った間柄だったが、志穂も里美も初めて見たときに、まさしく由美子の母親だとすぐに確信できた。

細身の身体に眼鏡姿の母親は、それだけ由美子に似ていた。いや、正確には、由美子が母親にそっくりなのだろうが。

「こんにちは。あの、由美子さんの具合どうですか？」

二人は放課後、担任に由美子の欠席の理由を訊いていた。生理痛だったら、別に見舞いに行く事もあるまいと思ったのだが、やはり、軽い風邪との事だ。

軽い風邪ぐらいで見舞う必要も特に無いのだが、つまり、彼女達にとっても暇つぶしなのだ。

「熱も直ぐ下がって、意外と元気よ。どうぞ、上がって」

由美子の母親は、笑顔で言った。

二人は二階にある由美子の部屋に通された。ドアを開けると、由美子は上半身を起こして読書をしていた。

「あら、来てくれたの」

彼女は眼鏡に手を添えて微笑んだ。

三人はクラスでも比較的仲が良い。比較的、と言うのは、仲良しグループに固執して他の娘達とは殆ど話もしない連中とは違い、三人共、他にも仲の良い娘がいるからだ。

ただなんとなく、ここ一番の時は三人が集まる。と言うか、本当は四人なのだが……

「もう一人、お客さんよ」

由美子の母が、そう言って部屋のドアを開けた。

「ご機嫌いかが？」

入ってきたのは風見玲子だった。

彼女の父親は六本木ヒルズに会社を構える企業の社長だ。スラリとした長身と品の在る顔立ちは、同じ制服を着ていても、違う服に見えてしまうから不思議だ。

ツヤのある黒い巻き髪も、何処か高校生離れしている。

「ずるいわ、あたしを除け者にして」

玲子はそう言って、里美の隣にペタツと座りこんだ。

こう言うては何だが、玲子はクラスでも友達は少ない。別に彼女の家が金持ちだからと言ってツンケンと威張り散らしている訳ではないのだが、一種の妬みが彼女を受け入れないのだ。

最初は志穂も敬遠していたが、里美があまりにも普通に接しているのを見て、何となく一緒にいるようになり、付き合ってみると意外に人がいいし、他の娘には無い人懐っこさがあった。そして、何より……

「これ、みんなで食べてくださいな」

再びノックの後にドアが開いて、由美子の母親が大皿いっぱいのお夕張りメロンを持って来た。

「お母さん、どうしたの？ それ」

由美子が眼鏡の奥で目を丸くしている。

「風見さんのお見舞いよ」

みんなの視線が玲子に集まって

「手ぶらでくるのも、ねえ」

玲子は無邪気な瞳で笑う。

手ぶらで来てしまった志穂と里美は思わず顔を見合わせた。

そうなのだ、彼女と一緒にいると、こんな事がしょっちゅうで、玲子にしてみれば、彼女なりの気の利かせ方なのだが、他の娘達は時にそれが鼻につくのだろう。

勿論、この部屋にいる三人は慣れっこで、それを楽しんでさえいる。

以前、玲子に誘われて一緒にJリーグの試合を観に行ったら、送り迎えはリムジンで、席はガラス張りのVIP席だった。

「玲子は相変わらずね。有難う」

由美子はそう言って、笑った。

由美子と玲子は、いかにも接点が無いように見えるが、外国の何とかという恋愛文学小説の話で盛り上がり、意気投合したらしい。

「玲子、今日ピアノの日でしょ。だから、声かけなかったのよ」

里美が言った。

「そんなの、時間をずらしてもらったわ」

彼女はさらりと言って、メロンを一切れ手に取った。

志穂もメロンを口にして、何気に窓から外を覗いて「やっぱりと呟いた。

通りを塞がなきゃ大きき白いロールスロイスが、家の前に停まっていたのだ。

この四人にとってお互いが、一番気が置けないホームとなる。そして、当然のように他にも付き合いはあるのだ。

洋服や化粧品のお味の合う友達や読書の好きな友達。部活やサークルの仲間たち。玲子だけは、他の付き合いと言つと、令嬢として

の外交的付き合いの方が多いうつだが……

「ねえ、これって誰のか判る？」

志穂は三人に青色の熊のキーホルダーを見せた。

「ずいぶん年期が入ってるわ」

玲子が眺めて言った。

里美がキーホルダーを手に取って

「玲子のじゃない事は、間違い無いわ」

「あたし、似たのもってるけど……」

由美子はそう言って、ベッドの横に置いていた携帯電話を取って見せた。その携帯にぶら下がっているのも、確かに青いディーベアだった。

「これと記憶違いしてたのかな」

志穂は、由美子の携帯を手に取って、ストラップに付いている熊を眺めた。

里美が手に持っていたキーホルダーを志穂に返し「これが、どうかしたの？」

「ウチの、玄関で拾ったんだけど、前に何処かで見覚えがあった」

「それで、持ってたんだ」

「きつと、由美子の携帯ストラップが記憶にあったのね」

志穂はそう言って、キーホルダーを鞆に仕舞い込んだ。

電話（1）

片山家の電話が鳴った。

父は大阪に出張、母は今日から婦人会の旅行に二泊三日で行っている。

弟の浩志はまだ学校から帰っていない。学校帰りに、何時もそのままバイトに行っている為、遅くなると夕飯も済ませて帰ってくる今日は、確か遅い日だった。

志穂は、由美子の見舞いから帰って、部屋で音楽を聴きながら宿題をしていたが、曲と曲の間の数秒間に電話の音が聞こえて顔を上げた。

窓の外は、何時の間にか真つ暗な闇に包まれていて、窓ガラスに映る自分の姿を見て、一瞬ギョツとした。

そう言えば、今この家にいるのは自分だけだ。

彼女は仕方なく電話を取る為に、部屋を出て階段を下りながら「二階にも電話付けてよね」と思わず呟く。

私用の電話は大抵、携帯にかかってくるので、父か母宛だろうと思つと思わず居留守を使いたくなる。

「はい、片山です」

受話器を取ると、静まった空気が受話器から流れ出てくるような、そんな感じがした。

微かな息遣いが聞こえる。

悪戯かと思ひながら、志穂は思わず耳を澄ました。

聞こえてくるのは静かな息遣いだった。深く吸って、深く吐いているような。

「もしもし？」

志穂は受話器に向かって言った。

ザッと、テレビの砂嵐のようなノイズが突然聞こえて、志穂は思わず受話器から耳を離す。耳を離しても、そのノイズは十分に聞

こえて来た。

「なに、これ…… 故障？」

志穂が受話器を置こうとした時、ノイズ音が消えた。彼女は受話器を置くのを止め、念のため、再び受話器を耳元に当てて

「もしもし？」

さつきと同じようなノイズが、しかし、物凄く微かな音で続いていた。

志穂は何故かその音にじっと耳を澄ました。

耳を澄ましたくなるような、何とも言えない曖昧な、そして、小さい音だった。

その向こうには、何処までも続く果てしなく荒涼とした暗闇が広がっているような、それを何とか遠くまで見渡そうとする自分がいるような、そんな不思議な感覚に志穂は落ちていった。

誰もいない家の中は、水を打ったように静まり返って、彼女の頭の中が受話器から聞こえるノイズに侵食されていくようだった。

そのうち、プツ………プツ………と言った感じの、ラジオの雑音のような、違うノイズが混ざり出した。

志穂の意識は更に、電話の向こうの見えない闇の音に引き込まれて行っった。

「シホ………」

ノイズに混じって微かに声が聞こえた。弱々しく、切ない響きだった。

その瞬間、静まった空気が凍りつくような気がして、志穂は全身に鳥肌がたった。

「だれ？」

「ツーツーツーツー………」

途端に電話は切れた。

志穂は思わず手に持った受話器を見つめ、もう一度耳に当てたが、プーと言う普通の信号音が聞こえるだけだった。手はしっとり汗で湿っていた。

ガチャリツと突然正面の玄関ドアが開いて、志穂は飛び上がるほど驚いて、

「ヒッ！」

と、声にならない悲鳴を上げた。

本当に恐怖に引き攣った時、とっさに「きゃー」と言う声はなかなか出ないものだ。

「ただいま…… どうしたの、姉貴」

引き攣った顔のまま、受話器を握り締めて固まっている姉の姿を見て、浩志が言った。

電話(2)

部屋に戻った志穂は、宿題が途中のまま手に付かなかった。

「あの声…… 前に浴室で聞いた声だわ」

しかし、その声の主が判らない。

だいたい、何故、電話から聞こえた声と、浴室で聞こえた声が同じなのだろう。

電話から声が聞こえるのは当り前だが、浴室で聞こえた声は…… いったい何処から聞こえたと言うのか……

それとも、ただの空耳？ 電話も、浴室も一定のノイズが響いている時だったから、自分の聞き違いなのだろうか。志穂はそう思った。

突然携帯の着信音が鳴った。

考え事をしていた志穂は、ビックリして、椅子ごと後へひっくり返りそうになった。

電話かメールか、着信音を聞いただけで判るように分けてある。

メールの着信を知らせる音だった。

志穂は充電器から携帯を取り外して、二つ折りの携帯電話を開いた。

友達からではない。アドレスをメモリーしている相手からの着信は、液晶モニターに相手の名前が表示されるのだ。

「誰だろう」

呟きながらメールを開く。

『たすけて、シホ』

表示されたメッセージを見て、志穂は息を呑んだ。

「何？ だれ？」

彼女は相手のアドレスを確認する。

パッと見、見た事の無いアドレスだった。しかし、アドレスの前半部分に記されたアカウントの文字を読んで、再び志穂は驚いた。

『chie@.....』

「チ工?.....」

チ工と言えば、思い当たるのは転校前、世田谷の小学校、中学校と親友だった太田千絵しか思い浮かばない。しかし、志穂が携帯を持ち始めたのは高校二年になってからだ。

中学二年生で転校した志穂は、しばらくの間は電話や手紙で千絵とも連絡を取り合っていた。

四、五回、世田谷まで出向いたり新宿で待ち合わせたりして遊んだ事もある。

しかし、時の流れと共にそんな行動も遠のいて、高校に入ってからはお互いに電話も手紙もないままだ。だから、千絵が志穂の携帯電話用メールアドレスを知っているはずが無いのだ。

アドレスの後半部分を見る限り、おそらく最近多い、無料で取得できるメールアドレスのようだった。

志穂は少しの間、本文と差出のアドレスを交互に眺め返していたが、ふと気が付いた。

「返信してみよう」

彼女は、単純に送られてきたアドレスに返信する機能を使い「あなたは誰?」と言う文面を打ち込んで、送信ボタンを押した。

これで、返信されるはずだ。

二、三分たった頃、再び着信音が鳴った。

「来た!」

志穂は、メールを開いて驚愕した。

『サーバーエラー通知 ***** 宛先不明のためお届けできませんでした.....』

「そんな.....」

志穂は呆然と携帯の液晶画面を見つめた。

事故(1)

「あれ、志穂、今日は自転車？」

学校帰りの校門で、里美が声を掛けて来た。

「うん。帰りに買い物あるから。昨日からお母さん出かけてるんだ」

志穂は、夕飯を帰りに買おうと思いい、どうせなら大きなスーパーにでも寄っていいこと思っていた。

「あたしも付き合っよ」

里美が言った。

二人は校門前の銀杏並木の下を歩いた。並木通りは駅のロータリ―に向かつて緩い下り坂になっている。

志穂の家の方角からは、朝は下って学校へ向かうが、帰りは上り坂なのだ。だから、帰りは坂道が終わるまで自転車を押して歩く。

乗って上れない事もなく、現に男の子達は平気で自転車に乗ったままこの坂道を駆け上がる。

志穂も以前、一度だけチャレンジして上まで上れる事は確認済みなのだが、一、女子高生として、こんな所でひと汗かきたくは無いのだ。

久しぶりに、しばらく続く並木道を歩いていると、隣を歩く相手は違っているが、志穂は千絵と一緒に歩いた、世田谷の並木通りを思い出していた。

千絵…… 今頃どうしているのだろう。

高校に入って、それなりに青春を謳歌してきた彼女にとって、何時の間にか千絵は思い出だけの存在になっていた。

こうして並木を見て時々思い出す事はあっても、ほんの一瞬の回想に過ぎなかった。

しかし、昨夜のメールを見てからと言うもの、千絵が今どうしているか、非常に気になっていた。

後方で瀟洒な自動車のホーンがなった。普通の自動車のクラクシ

ヨンと違い、全く尖った苛立ちを感じさせない音色は、玲子の家の車だと直ぐに判る。

志穂と里美が振り返ると、玲子を乗せた白いロールスロイスが二人を追い越していく。

後部座席の窓を開けて、黒い巻き髪を風に揺らした玲子が手を振っていた。

二人も手を振り返す。

手を振る玲子の姿は、何時も普通の少女だ。

普段、親しくも無い人から見える近寄り難い雰囲気は微塵も無い。しかし、それは彼女に手を振られた者にしか判らなかつた。

車は滑るように、滑らかに坂道を昇って視界から消えていった。

その直後、ドカンツという物凄い音が、前方から聞こえた。

金属、ガラス、プラスチック、それぞれが同時に壊れて破裂したような凄まじい音だつた。

志穂と里美は顔を見合わせた。そして、どちらとも無く坂道を駆け上がった。

坂道を昇り切つて最初の交差点が見えた時、二人の目に飛び込んできたのは、大きな青いトラックが信号機の柱にぶつかつて、信号機が斜めに傾いている姿だつた。

勿論トラックの全面部はグシャグシャに潰れて、窓ガラスも粉々だ。

しかし、そのトラックの向こうに見えた物で二人は大きく目を見開いた。

「玲子……」

里美が呟いた。

トラックの向こうに見えた物、それは先ほどまで玲子を乗せて優美に走っていた白いロールスロイスだつたのだ。

志穂はその場に自転車を放り投げて駆け出した。里美はそれより一足先に走り出していた。里美は小学校の頃から玲子と友達だつたのだ。

* * * *

鈴木里美は小学校五年生の秋に、春日部から転校して来た。

「鈴木さん。あたし達、今度壁新聞コンクールに出す新聞作るんだけど、一緒にやらない」

里美は持前の明るさで、すぐにクラスに溶け込む事が出来た。

学校帰りも、一緒に帰る友達など直ぐにできた。しかし、里美はこのクラスに転入した日から、休み時間になると教室の窓際が一番後ろで、何時も一人で読書をしている娘が、ずっと気になっていた。綺麗な黒髪が窓から入る陽射しに輝いていた。

彼女は休み時間も特に仲良く話す相手もいなようだし、かと言ってイジメにあつてる様子でもない。クラスのみんなも用事があれば普通に話をしている。

しかし、どう見てもクラスに溶け込んでいる感じは無かった。

「ねえ、風見さんって、どうして何時も一人なの」

ある日の学校帰り、里美は何時も一緒に帰る梨香に聞いてみた。

「ああ、風見さんはね、いいのよ」

もう一人、一緒に帰っている潤子が笑って

「彼女はいいの。令嬢は、庶民とは遊ばないんだって」

「令嬢？」

「彼女の父親は六本木にある会社の社長なの」

「だから？」里美は訊き返した。

「だ、だから……あたしとは合わないのよ」

梨香は少し困ったようにそう言った。

「ねえ、たまには一緒に帰らない？」

ある日、里美は放課後の昇降口で、風見玲子に声を掛けた。靴を履き替えていた彼女は、ツヤのある黒髪を揺らして、無表情に

「それはムリね」

「どうして？」

里美が歩き出した玲子についていくと、正門まで来て

「方向が違うでしょ」

「途中まで一緒でしょ」

「でも、ほら」と玲子が示す視線の先には、大きな水色のジャガーが停まっていた。

もちろん、里美には車種などわからないが、ピカピカのボディに辺りの景色が映り込んでいるそれが、高級外車という事はわかった。

「それじゃあね、里美さん」

玲子が後部座席に乗り込む時、手を振りながら一瞬見せた笑顔は、紛れも無く小学生のものだった。

制服姿の紳士がドアを丁寧に閉め、里美に一礼した後、運転席へ乗り込んだ。静かに走り出す車を里美は少しの間見つめていた。

この学校へ転校して以来、みんなは仲良くしてくれるが、里美の事を「鈴木さん」と呼ぶ。春日部にいた頃はみんな「里美」と呼んでくれていた。

もちろん、時間が経てばそのうち名前で呼んでくれる友達もできるだろう。しかし、初めて名前で呼んでくれた玲子に、この時里美は何となく親近感を覚えたのだった。

事故(2)

小学生の頃のある日、里美は母親に頼まれたお使いで、近くの大通りに面した親戚の家に来ていた。

片側三車線の国道十六号線は、里美の家から自転車です五分程の距離だった。

お使いの帰り道、ニッサンディーラーの前を通った時、側道から犬が飛び出てきた。

「ダックスフンド、いや、ミチュアダックスだった。」

飛び出して、と言っても、走ると言うよりは早歩きと言う感じで短い足を細かく動かしながら、タレ耳をなびかせて歩道を横切る犬の姿を、里美は呆然と眺めていた。しかし、その先は片側三車線の大通り。大型トラックもバンバン行き交う幹線道路だ。

里美は自転車を投げ捨てるように飛び降りて、犬を追いかけた。「渡っちゃダメ!」

里美が叫んだ声に犬が反応して立ち止まり、こちらに振り返った。しかし、そこは既に一番左の車線の真ん中だった。

「呼ぶんじゃなかった……」里美は後悔した。しかし、自分も既に車道に飛び出していた。

その時、大型トラックが近づいていた。犬の姿は確認出来なかったが、飛び出た女の子の姿は、すぐに運転手の目に留まった。

大きなクラクションと同時にブレーキが鳴った。

ドラマのように道路を突っ切って向こう側へ行けない事は、里美には判っていた。真ん中の車線の車は途切れていなかったからだ。犬を抱えた彼女は、元いた歩道へ跳んだ。思ったより犬は軽かった。トラックの前輪は、里美が最初に飛び出した場所を越えて停止した。

「バカ野郎!」

後続車にはお構いなくトラックをその場に停めたまま、運転手が

凄い剣幕で降りてきた。しかし、それは、「俺は悪くない」と言う、周囲へのアピールに過ぎなかった。

「大丈夫か？」男は歩道に倒れている少女へ駆け寄った。

「里美？」

路地から犬を追いかけて走って来た風見玲子が、自分の犬を救った少女の顔を間近で見て叫んだ。

里美は玲子の連絡で飛んで来た執事によって、近くで一番大きな病院へと運ばれたのだ。

連絡を受けて駆けつけた彼女の両親には、風見家の執事から説明と謝罪があった。玲子も謝っている姿が、病室の扉の向こうにチラリと見えた。

里美の両親は、大げさに広い病室に比べ、娘の怪我の軽さに思わず笑っていた。両親共に比較的呑気なのである。

「大げさね。こんな大きな病室に」

ベッドの上で里美が玲子に向かって言った。

玲子が笑って、「当然の事よ。ラッキーの恩人ですもの」

「ラッキー？」

「あの仔の名前よ」

「ラッキーねえ」

里美は自分のアンラッキーに肩をすくめて笑った。

しかし、彼女の怪我は、膝と肘を擦りむいて、頭を少しぶつけただけだった。

玲子の方でどうしてもと、一晩入院させられたが、ことさら元気だった里美は、どうにも退屈なのと、翌朝わざわざ看護師が検温に来たので、とても恥ずかしかった。

翌日の午後、玲子の子のジャガーで家まで送ってくれた。もちろん、玲子も一緒に来ていた。

「ねえ、玲子。車で登下校するのはいいけど、裏門に着けてもらった方がいいんじゃない？」

奥津城（おくつき）

「どうして？」

「みんな、僻むわ」

「そう言うものなの？」

「たぶんね」

「判った。里美の忠告なら聞くわ」

玲子は屈託の無い笑顔で言った。

救出

交差点内は、事故の為、他の車が立ち往生していて、間近の車からは数人が様子を見ようと下りてきていた。歩道からは通行人たちが遠巻きに見物している。

志穂と里美はそんな交差点を一気に横切った。

ロールスの全貌が見え、二人はさらに驚愕した。

真ん中から後に掛けて、壊れたおもちゃのように大きく潰れていたのだ。

駆け寄って、まずドアを……と思ったが、ドアとボディーが一体になって潰れている為、どうにもならない。潰れた車内の奥に玲子の身体が僅かに見えた。

「玲子！」

思わず里美は叫んだ。

運転席も僅かに潰れている、いや、それでも随分つぶれている。

が、運転手の身体は無事らしい。もちろん怪我の具合は判らないが

……

問題は身体が半分だけ見えている玲子が生きているのか、外からは判らなかった。

窓ガラスは凄いひび割れで白くなり、グニヤリと曲がっているにもかかわらず、砕け落ちていない。

完全な防弾の合わせガラスなのだ。細かいひび割れで白くなっている為、余計に車内が見えづらかった。

志穂は鞆から携帯……しかし、鞆は自転車のカゴに入れたままで。その自転車は交差点の向こうに放り出してきた。

「里美、携帯！」

その声で里美も気付いて、素早く鞆から携帯を取り出そうとする。が、気が動転しているのか、鞆のファスナーを上手く開けられない。彼女がやっと開けた鞆に、志穂が手を突っ込んで携帯電話を取り

出し、そのまま一一九番に電話する。警察には救急から直に連絡が行くはずだ。

「あっ」

里美が叫んだ。

「何？」

「今、腕が、玲子の腕が少し動いたよ」

「ほんと？」

志穂も再び潰れた車内を覗き込む。

玲子の身体は、リヤシートの下に潜り込んでいるようだった。上手くいけば身体が潰されていないかもしれない。

顔が下を向いて、髪の毛が掛かっている為、彼女の表情は全く判らなかった。

他の車のドライバーも散り散りにトラックとロールスの周りに近づいて、事故の悲惨さに、何か自分達で出来る事はないかと表情を曇らせながらうろついている。

志穂の隣では、運転手を助け出そうと数人の男がドアを押し開けようとするが、人の力ではやはり開けなかつた。

まもなくしてパトカーと救急車のサイレンが聞こえて来た。車の状態を見て、直ぐにレスキューを呼んでいる。

救急隊の一人が、なんとか窓ガラスを丸ごと取り外し、車内に潜り込んで玲子に声を掛ける。

その声に反応するかのようには彼女の腕と頭が微かに動いた。

「生きてる！」

顔を上げると、何時の間にか交差点の周りには人ばかりで、志穂達の学校の生徒も沢山集まっていた。

「下がって！」

レスキュー隊が到着すると、志穂と里美は後ろへ下がるよう促された。

金属カッターを使ってボディを切断する大きな火花が、虹色に光って、潰れたパールホワイトのボディに映りこんで溶けていっ

た。

「ふう……」

志穂は家の玄関を入ると軽く息をついた。

「お帰り」

浩志がリビングから出てきて「どうなった？」

「うん。命には別状ないって。シートベルトをしていなかったのが幸いしたみたい」

志穂は救急車で玲子と一緒に病院へ行き、両親へ連絡を取って、容態を見てからようやく帰宅したのだ。

事故はトラックの信号無視らしい。トラックの運転手は重体の為、事情は意識が回復してからになるそうだ。

玲子の方は、ぶつかった衝撃で身体が横になり、そのままシートの下に転げ落ちた為、半分以上潰れた室内でも無事だったらしい。腕は骨折したが、すぐに意識を取り戻し、他は打撲程度だと言う。

一緒に運ばれた玲子の運転手は鞭打ちのみで、一番軽い怪我で済んだようだ。

「鈴木さんって人が、姉貴の自転車と鞆、持って来たよ」

「うん。頼んでんだ。浩志、ご飯は？」

「ああ、コンビニで買って来て喰った。から揚げ弁当ならあるよ」
「やんちゃな弟だが、意外と気が効く奴。と志穂は思った。」

「それ、貰う」

そう言って、志穂は部屋へ行って着替える為、階段に向かった。

「あの人、顔色真っ青だったよ」

「誰？」

「鈴木さんて人」

「里美が…… そう」

あんな事故を見た後だから、志穂はそう思った。

「里美、一緒に乗って」

救出された玲子はストレッチャーに乗せられ速やかに救急車に運び込まれた。

救急隊の人が、「一緒の方は？」と言ったので、志穂は里美に声を掛けたのだ。

「志穂、行ってあげて」

里美の顔は真つ青だった。志穂の横でしゃがみ込んでいる。

「大丈夫？里美。あんた、一緒に行つて見てもらったら」

「大丈夫、少し休めば。志穂の自転車届けておくから電話ちょうだい。さ、早く行って」

志穂は里美に促される形で、一緒に玲子の救急車に乗り込んだのだ。

その時、里美には見えたのだ。玲子の魂の輝きが。

車内から助け出されたとき、確かに見えたソレは、彼女のグツタリとした身体とは裏腹に、生き生きとして輝いていた。

生々しく輝く魂を初めて見たショックとその安堵で、里美は地べたにしゃがみ込んでしまったのだ。

大丈夫…… 玲子は大丈夫だ。

そう思うと、腰が抜けたように立ち上がれなかったのだ。

キーホルダー

一休みして回復した里美は、志穂の自転車に乗って彼女の家を指していた。勿論彼女の鞆も一緒に。

玲子と一緒に救急車に乗り込んだ志穂に代わって、この荷物を運ばなくてはならない。

里美も、志穂の家には何度か遊びには来ていたので、道は知っている。そして、家の裏が大きな墓地だという事も。

里美は志穂の家に来ると、何時も落ち着かなかった。家の裏から何とも言えないざわめきを感じるのだ。

そう、彼女は俗に言う霊感が強い、と言う類なのだ。しかし、それを理由に志穂の家を拒むほどではなかった。

ただ、何となく感じる、と言う程度なのだ。

何時も志穂が使っているバス停の近くから大通りを曲がって住宅街へ入る。

最初に大通りから入る場所を間違えなければ、後は二回曲がるだけで志穂の家の前だ。

まずはタバコの自販機のある場所を左に曲がって、少し行ってドクターペッパーの自販機を今度は右へ曲がる……

「何、これ……」

彼女は思わず自転車を止めた。

目の前には銀杏並木が続いていた。

「何時の間にか、道路を広げたのかしら……」

本当ならこの道を五十メートルも行かないうちに志穂の家が見えるはずなのに、その並木道は何処までも続いていた。

「何で……」

里美は直ぐに戻ろうかと思ったが、道が違っていたら何処かで曲がればいいや、と思い、再び自転車を前に進めた。しかし、その並木道は恐ろしいほどに一本道で、途中、何処にも入る路地が無い。

新興住宅地は暮盤の目のように区画ごとに路地があるので、こんなにひたすら一本道と言う事はあり得ないのだ。

さっきまで晴れていたはずの空は、何時の間にかどんよりと薄紫色の雲が広がって、太陽は何処かへ行ってしまっている。

里美は自転車を止めて、後ろを振り返った時、冷たい汗が流れてきた。

後ろにも果てしなく続く並木道が続いて、自分が曲がってきた路地が見えなくなっていた。

周りに建ち並ぶ家は人の気配が無く、まるで張りぼての、映画のセットの中にも投げ出されたようだった。

「すみません」

か細い声に、ハツとして、里美は向き直った。

一人の少女が正面に立っていた。

紺色の、中学生がよく着ている制服姿だったが、生気の無いその顔は、空を覆い尽くした異様な雲が映りこんだように薄紫色に陰っていた。

何故だかり美の目は、その少女の持つ鞆に止まった。

熊のキーホルダー…… 志穂が見せていたキーホルダーだ。

灰色にトーンダウンされたような全体の風景の中にあって、その熊の青色だけが鮮やかに揺れ動いていた。

「な、なにか？」

自転車のハンドルを持つ手が震えた。ブレザーの下の、腕の産毛が逆立つのを感じた。

里美は今まで霊のようなモノを感じた事はあったが、幽霊という物体を見たことは無い。

実際に人の形をした幽霊はいないのだと思っていた。霊はあくまでも強い残留思念だから、いくら写真には人型に映りこんでも、映画のように人間の容で目の前に現れる事など無いと思っていたのだ。しかし、彼女は直感で、目の前の少女がこの世の者でない事が判った。

「志穂の友達でしょ」

志穂…… あたしの知っている志穂の事だろうか。でも、どうして中学生に呼び捨てにされているのだろう。

「志穂って、片山志穂の事？」

青白い少女は肯いて

「仲いいんですよ」

「え、ええ。まあ」

里美は理由が判らず肯いた。

「よかった。志穂はあたしがいなくてもきつと平気ね」

「えっ、どう言うこと？あなた、誰？」

少女の身体から光が発して、あまりの眩しさに里美は目をつぶった。綴じた瞼の向こうから光が滲んでくるようで、両手で顔を覆った。

平衡感覚が揺らいで、自分がぐるぐる回っているようだったが、何故か倒れはしなかった。

身体が熱かった。ものすごい熱さだ。

「なんなの！」

思わず里美は叫んだ。

「どうしました？」

オバサンの声がして、里美は目を開けた。

「大丈夫？」

一人の主婦らしき女性が、スーパーの買い物袋を片手に里美の横で心配そうに顔を覗き込んでいる。

そこは、見覚えのある、車がやっと二台すれ違えるくらいの路地だった。目の前には、志穂の家の屋根が見えた。空は再び晴れ渡り、夕方の低い太陽に照らされた里美の影がアスファルトに長く伸びていた。

「あ、平気です。すみません」

そう言って、里美は自転車のペダルを踏み込んだ。

「でも、良かったね。無事で」

休み時間の教室で由美子が言った。勿論、昨日の玲子の事だった。もう、心臓止まりそうだったよ」

志穂が溜息をつきながら言って「昨日、有難うね。自転車」と里美の肩を叩く。

「うん」

「どうしたの？」

気の無い里見の返事に、志穂が訊く。

「ねえ、志穂」

「何？」

里美が真剣な顔で「中学生の友達っている？」

「何、いきなり。そんなのいなよ。浩志が中学生の頃は、知り合いとかいたけど」

「そっだよね」

里美が呟いた。

由美子が机に座って足をぶらぶらさせながら「何か変だよ。里美」
「ねえ、志穂。あのキーホルダー、まだ持ってる？」

「え？」

「熊のキーホルダー」

「あ、ええ。鞆に入れたままだと思うけど」

志穂は自分の鞆をこそごとと漁って、キーホルダーを取り出した。

里美は引っ手繰るよに、それを掴んで見つめると

「やっぱりこれだ」

「どうしたの？」

志穂は怪訝な顔で訊いた。

「昨日見たのよ。このキーホルダーを鞆に付けた女の子」

「何処で？」

「志穂の家の近所よ。中学生の制服を着てた」

「でもさあ、これは志穂が持つてるんだから、その女の子が持っていたのはこれじゃないでしょ」

由美子が割り込んだ。

里美はキーホルダーを眺めて「そうなんだよね」

「これを落として、同じ物を買ったんじゃない」

「そうかもね」

里美はそう言って肯いたが、彼女には、あの時鞆にぶら下がっていたのは確かにこれだ、と言う確信があった。ただ、その根拠が自分でも判らなかつた。

あの娘が生きた人ではないと感じた事も今となつては自分でも半信半疑だつた。だから里美は、その事はみんなには言わなかつた。

再会（1）

十月も半ばを過ぎると夕暮れが早い。日が傾いたと思うと、あっという間にあたりは暗くなってしまう。

志穂は今日こそは電話をしようと思っていた。勿論、太田千絵の家にある。

あの、不審なメールの後、すぐにでも電話をして確かめようと思っていたが、その翌日に玲子の事故があつて、その後何日かは、彼女の病院に見舞いに言ったりして時間が過ぎて行った。

押入れの中のダンボールを漁る。ここへ引越して来た時のダンボール箱が幾つかそのまま押入れに入っている。

「無い……」

古いアドレス帳はなかなか見つからなかった。それだけ、使っていないと言う事だ。

ふと、ここへ来てからも何度か千絵に電話している事を思い出して、机の引出しを探す。一度目は見つからなかったが、二度目に隈なく探した所、二段目の引出しの奥に、古いアドレス帳は挟まっていた。

大きな熊の絵が描いてある。確か、このアドレス帳は千絵に貰ったものだ。

今は、携帯電話一つに何でも入ってしまうが、昔はみんな、こうしたアドレス帳を持っていた。昨今、中高校生が手帳を持っているとすれば、プリクラの収集用だろう。

志穂のアドレス帳も空いているページには所狭しと、プリクラが貼ってあった。

太田千絵の名前は直ぐに見つけた。階段を下りて廊下にある電話の前に立つ。

「もうすぐご飯だからね」

志穂の気配を感じた文江が台所から声を掛けた。

「うん」

志穂は軽く返事を返して、電話を見つめる。

もう、何年も連絡を取っていない………勿論、志穂は今でも千絵の事を大切な友達だと思っている。それでも、何年ぶりかで掛ける電話は緊張してドキドキする。

あんななんか、もう、友達でも何でも無い。なんて言われたら。そんな、余計な妄想が彼女の頭の中に広がる。

受話器を取り、意を決してプッシュボタンを押す。

電話の向こう側でコール音が鳴った。

一回、二回、三回…… コール音が鳴る間、心臓の鼓動はどんどん速まって、耐え切れなくなる。

十回目で、彼女は電話を切るうとした。

「はい……」

女性の声だ。年老いて聞こえる声は、千絵の母親だろうか。もう、随分聞いてないので声だけでは判断出来ない。それどころか、志穂は千絵の声さえもはつきりとは思いついて出せないでいた。

「もしもし、太田さんの御宅ですか？」

「そうです」

「片山と申します。以前、お世話になった、千絵さんの同級生の片山志穂です」

志穂は言葉が纏れないように、一気に喋った。

「ああ…… 志穂ちゃん？」

「そうです、志穂です。お久しぶりです」

「ほんとうに、久しぶりね」

「あの、千絵は元気ですか？ どうしてるかと思って……」
途端に電話の向こうは沈黙した空気が流れて、それは、受話器からも十分に伝わってきた。

「いるわよ…… だけど、今はちょっと電話に出れないの」

「そうですか」

「何か伝えておく？」

「いえ、元気ならいいんです。また、電話してもいいですか？」
「え、ええ」

志穂は軽く挨拶をして電話を切ったが、どうも母親の様子がおかしい事は判った。ただ、それがどうしてなのか、そこまでは判らなかった。

千絵は、あたしと話したくないのかしら……
でも、それならメールは？ しかも、あのアドレスに返信出来ないのはどうしてなのだろう。それだけでも千絵に訊きたかった。

二、三日して、志穂は再び千絵の家に電話をかけた。しかし、出たのは母親で、やっぱり以前と同じ対応を受けた。

「あの……もしかして、千絵はあたしに会いたくないのでしょうか？」志穂は思わずそんなことを訊いた。

「そんな事ないわ。ただ、ちょっと事情があつて……」
母親はなんとなく言葉を濁すだけだった。

再会（2）

青い空に浮かぶ雲がやけに高く感じて、志穂は車窓から空を見上げた。爽やかな風が吹く中、彼女は数年ぶりで渋谷から小田急線に揺られていた。

一週間考えた末、彼女は直接千絵に会ってみようと思ったのだ。駅から続く道を歩いていると、当時の思い出が蘇えってくる。古かった建物は綺麗なマンションやアパートに変っているが、当時の街並みはそのままだった。

記憶よりも千絵の家は一回り小さく感じたのは、自分が大きくなったせいかしらと志穂は思った。

玄関の前に立ち、呼び鈴を鳴らす。

少しの間があつて、ドアが細く開いた。その途端、弾き出されたように線香の臭いが漂って鼻孔を刺激した。

「どちら様？」

細い隙間から志穂を覗き見た女性は、それが誰なのか察しがついたようだった。

「片山志穂です」

「あ、ああ。志穂ちゃん」

あまり歓迎されていない事が彼女の表情から見て取れた。

「あのう、近くまで来たものですか、千絵は元気かと思って」

近くまで来た。勿論ウソであるが、突然の訪問にはありがちな理由だ。

カチャリとドアのチェーンを外す音が聞こえた。

まだ、夕方なのに、ドアのチェーンまでかけるだろうか。それとも、この辺りは昔に比べて物騒になったのか。そんな事を、志穂は考えていた。

ドアが開くと、千絵の母親の姿が見えた。年のせいばかりとは思えないほどにやつれている。志穂の母親とも同世代くらいのはずだ

が、十歳は老けて見えた。

「あのう、お体の具合でも？」

志穂は思わずそう訊いてしまった。

「いいえ、最近ちょっと疲れてね」

彼女はそう言っつて、無理やりの笑顔を浮かべて

「よく来てくれたわね」

「急にお邪魔して、ご迷惑だったでしょうか？」

「そんな事無いけど……」

母親は何か言い難そうに

「ただね、千絵は、昔の千絵じゃないの」

とりあえず玄関からは上げてもらい、リビングへ通された。家中全体が、何となく焼香の匂いがする。奥の和室には確か千絵のお婆さんの仏壇があったから、お線香でも上げていたのかと志穂は深く考えなかった。

「千絵が、昔の千絵じゃないって、どう言う事ですか？」

「ちよつと、記憶をなくしてね。あまり、話も出来ないの」

千絵の母親はお茶を入れながら話した。

「記憶……ですか」

だから、電話に出られなかったのかと、志穂の中では小さく納得した思いと、嫌われた訳じゃないと言う安堵の気持ち湧き出ていた。しかし、それと同時に彼女の容態を案ずる気持ちが大きく膨らんだ。

「原因は？」

「少し前に車に跳ねられてね」

「車にですか？」

「身体の方は、もう何ともないんだけど」

その時、強い焼香の匂いが漂ってきて、彼女は何かの気配に振り返った。

紫がかった青白い頬をして立つ女性が志穂の目に映った時、まるで幻か夢でも見ているような錯覚に陥った。

それは、あまりにも人間らしくない。そう、生きている気配が無いのだ。

「千絵」

母親が立ち上がったって彼女に近づいて行くと

「上で寝てなきやダメじゃない」

そう言っつて「千絵」と呼んだ女性の肩に手を掛た。

千絵。太田千絵。そうだろうか。

そう言われてみればそうに違いないかも知れない。

記憶を無くしているから表情が無いのだろうか。志穂を見ても何の反応もない彼女の表情を見て、それが太田千絵だと言っつ実感は志穂には沸かなかつた。

少し赤みのある頬をした健康的な千絵の笑顔とは、ほど遠い無表情で生気の無い瞳。

千絵は、何か珍しいものでも見るように、瞬き一つせず志穂に視線を向けているが、自分を認識して見ているわけでは無い。視線を交わしてみた志穂にもそれは判つた。

「千絵……」

志穂の口から思わず声が零れた。

母親は、千絵を二階の部屋へと促すと、肩を抱えるようにして一緒に階段を上つて行つた。志穂も立ち上がったってリビングの敷居の側で、階段を上る二人の姿を見つめた。

あれが、千絵……

記憶の中の千絵が笑いかけていた。何かを話し掛けているが、声が聞こえない。声が思い出せないのだ。

千絵の去つた後のその場所は、焼香の香りがいっそう強く感じた。

「千絵は、よくなるんですか？」

「判らないわ」

母親が目を伏せながら呟いた。

志穂は玄関で自分の靴を履いていた。あまり長居をしては迷惑だろうと思った彼女は適当に話を切り上げて帰る事にした。

本当はもっと訊きたい事が山ほどあった。しかし、今の千絵の母親の状態を見ると、あれこれ質問するのも気が引けたのだ。

家の中を取り巻く圧迫感のようなものも、彼女にとって耐えがたかった。

再び焼香の匂いが強く漂ってきて志穂は顔を上げる。母親の後ろに千絵の姿があった。やはり瞬き一つしないまま志穂を見つめていた。

「千絵、早く良くなってね」

志穂がそう言って笑顔で小さく手を上げる。

母親が気付いて振り返るが、その笑顔は何処か引き攣っていた。

千絵は、小さな子供が知らない人を見るような、呆然とした目で志穂を見つめるだけで、相変わらず、これと言った反応は無かった。かさかさの肌が、やたらと白く爛れている。

志穂は、もう一度母親に会釈をして玄関を出た。

家の中の空気が淀んでいた為か、外の空気が美味しく感じた。

再会（3）

帰り道、駅までとは逆方向だが、志穂はあの並木道を通りたくて遠回りした。まだ緑の葉の銀杏並木が続く通りへ出た彼女は、立ち止まってじつとその向こうを眺めた。住宅の狭間から中学校の校舎の一部分が見えた。

以前は白かった歩道の手すりも水色に塗られてはいたが、昔と変わらない景色がそこには広がっていた。

その時、スーツと目の前の建物や自分の影が突然消えた。

志穂が空を見上げると、真っ黒な雲が上空を埋め尽くして、さっきまで輝いていた太陽は消えていた。

サーッとシャワーのような音がして、みるみる路面が黒ずんで濡れていく。アスファルトの湿った匂い。志穂は、それさえも懐かしく感じていた。

彼女は果物屋の庇がかかる一番端の自動販売機の横に身体を入れ、雨を凌いだ。

地面に雨粒が落ちるのを見ていた志穂が顔を上げると、少し先から、傘を差した少女が二人、じゃれ合いながら歩道を歩いて来るのが見えた。

紺色の制服を身にまとい、黒い髪が傘の下から覗いている二人は中学生だろう。

志穂は思わず目を凝らして前のめりに見入った。

あまりにも見覚えのある二人。

あの、水色の傘…… あれは、あたしだ。でも、何で…… 今よりも幼い顔立ちに真っ黒な髪が揺れている少女は、確かに昔の自分だった。

隣の赤い傘は千絵。

正面から歩いてくる二人は、中学時代の志穂と千絵だった。

志穂は呆然と二人の少女を見つめていた。

さつき見た千絵とは比べ物にならないほど瑞々しい笑顔。

二人の少女は目の前まで来ていた。二人が目の前を通り過ぎる時、志穂は何故か顔を伏せた。

無邪気な頃の二人に、今の自分が後ろめたさを感じたのだ。親友と感じながら、何年も連絡を取らなかつた自分が恨めしかったのだ。下を向いたその視線に、通り過ぎる千絵の鞆が映った。

そこには、綺麗な青色をした、熊のキーホルダーが小さく揺れていた。

家に帰り着いた志穂は、急いで自分の部屋へ入り、机の引出しを開けた。そして、この前拾った熊のキーホルダーを手に取る。

間違い無い。これは千絵の鞆に着いていたものと同じだ。いや、おそらく千絵のモノだ。

志穂には何故だかそう確信できた。

しかし、何故。どうして千絵の持ち物だったものがあたしの家の玄関に？

ふと、里美が見たという少女の事を思い出した。彼女の見たという中学生。あたしを知ってるというその中学生も、これと同じキーホルダーを着けていたと言っていた。

まさか……

志穂は里美の携帯に電話した。中学時代の写真を探して、遠足の時に撮った千絵の写真を見つけると、写メールを使って複写した画像を送った。

折り返し里美から電話が来た。

「もしもし」

志穂が電話に出ると、里美は

「あの娘誰なの？」

「あたしがここに来る前に、世田谷の中学にいたときの友達よ」

里美は少しの間沈黙していたが、重そうな口調で

「その娘、最近亡くなった？」

「うん。今日会ってきた。身体の具合はよくなかったけど」

「そう……」

「里美の会った中学生って？」

「この娘だわ。間違い無い。もつと顔色は悪かったけどね」

やはり、里美の前に現れたのも千絵だったのだ。しかし、何故。

「実は、今日その娘にあった帰り道で、あたしも中学生の千絵と会ったの」

「本人に会った後で？」

里美が怪訝に訊き返した。

「なんだか、千絵が何かをあたしに訴えているような気がする」

「でも、その千絵って娘は、確かに生きてるんでしょ？」

志穂は少しだけ返事に迷った。

確かに千絵はあそこの家にいた。しかし、あの生気のない彼女を思い出すと、あれが本当に生きて人間なのか疑問さえ沸き起こるのだ。

志穂はゆっくりと肯きながら

「うん」と小さく応えた。

秘密（1）

うるこ雲が高い空に波のように浮かぶ、晴れた日曜の朝、切らした食パンを買いに志穂は外へ出た。一番近くのコンビニで買い物済ませて帰宅すると、家の横の路地に車が止まっていた。

「よっ」

仲村智也だった。

「どうしたの？」

自転車を止めて志穂が訊く。

「爺ちゃんのお墓なんだ」

「お爺さんのお墓、ここだったの」

「ああ、お前はとうしたんだよ」

「あたしん家、ここ」

志穂は、直ぐ横の自分の家を指差した。

「へえ、お墓のまん前なんだ」

智也は笑って言った。

「じゃあ、この墓地の事知ってるか？」

「なに？」

「いや、知らないならいいんだ」

智也は言葉を濁して、

「じゃあ、親が待ってるから」

と軽く手を上げると、車の横を通って墓地の方へ入って行った。

この墓地の事知ってるか？ この墓地に何かあるのだろうか……

志穂は智也の言葉が気になった。最近の不可解な出来事が、その思いをいっそう大きくさせた。

志穂は夜気の静けさを頭の隅で感じながら、真っ暗な世界が途端

に開けて行くのを見ていた。何も無く、何も聞こえない。まるで、この世に生を受ける前の世界に意識が飛んでしまったようだ。

ピンポンと、突然玄関のチャイムが鳴った。気がつくとも目の前には自分の家の玄関が在る。志穂は何の抵抗も無く扉を開けた。

そこには一人の少女が立っていた。志穂にはそれが誰なのか直ぐに判った。

「千絵……」

「元気？」千絵が言った。

「え、ええ。元気よ」

志穂はそう言いながら千絵の後に視線を向けた。彼女の後ろに広がっているのは長々と続く銀杏の並木道だった。

玄関は確かに自分の家のはずなのに、どうした事だろう。

「入れてくれないの」

千絵は笑った。

「あ、どうぞ」と、志穂は彼女を招き入れる。

しかし、そう言って振り返ると、そこは外の風景だった。

玄関だったはずなのに……

周囲が雑木林に囲まれ、所々に枝垂れ柳の木が、もの悲しげに枝を揺らしている。

一軒の家の裏側が見えた。志穂の家だ。

「ここは、裏の墓地だ……」

志穂の目の前には真新しい墓石が在る。おそらく、一番最近、そう、ついこの間納骨を済ませていたお墓だろう。

ふと見つめて、彼女は目を見開いた。

太田家之墓……

まさか…… まさか、そんな。

右手に冷たい何かが触れて、志穂がびっくりして振り向くと千絵が立っていた。

再び見た彼女の顔は、青白く紫がかって、血の気が全く無かった。

「千絵、あなた……」

志穂が、そう言いかけた時、千絵の顔の表面がセルロイドの人形のようにドロドロと溶け出した。

志穂はあまりの驚きに声が出せずに、後に身じろごうとするが身体が動かない。

千絵の顔は、皮膚がみるみる削げ落ちて、頭骸骨を露わにした。

ふと見ると、志穂の腕を掴んだ千絵の手も、白色の骨になっていた。僅かに皮膚と血管が纏わり着いている。

「やめて、千絵！」

志穂は全身の力を振り絞るようにして後ろへ身を引いた。

ドスンッという音と共に、背中に痛みが走って目を開いた。

自分の部屋の静けさが、まるで別世界のように感じた。

彼女は自分のベッドから転げ落ちていたのだ。

「夢……」

彼女は床に膝立ちになって、そのままベッドの上に上半身を突っ伏した。

あの声…… あれは千絵。前に聞いた電話の声も千絵だ。

ベッドサイドの時計に目をやると、二時十分だった。

秘密(2)

月曜日、学校へ着いた志穂は、智也を探した。もちろん、彼が昨日言った言葉の意味を訊く為だった。

智也は学校が終わったら話すからと言い、その場では口を閉ざしていた。

志穂は尚更気になって、この日は授業どころではなかった。里美達との雑談も半ば上の空だった。

放課後、里美と由美子に声を掛けられたが、ちょっと用事があると言って、そのまま校門を出た。校門を出た所で智也は待っていた。「で、どういう事なの?」

「うん。じゃあ、行こう」

「えっ、行くって、何処に?」

「行けばわかるよ」

志穂は智也に言われるままに、到着したバスに乗り込んだ。

「ねえ、こっちってあたしん家よ」

「そっだよ」

智也はサッカー部に所属しているせいか、歩くのが早かった。志穂は時々小走りになりながら智也についていった。

「やっぱり、あたしん家じゃん」

二人は志穂の家の前まで来ていた。

「用があるのはこっちさ」

智也は、志穂の家の奥に広がる墓地を指差して「実際にその目で見たほうがいいから」

志穂はあまり、気が進まなかったが、智也について墓地へと足を踏み入れた。

「この入り口には昔『奥津城』って書かれた立て札が在ったんだ」

「オクツキ?」

「墓所って言う意味らしい。今で言う『霊園』て言う呼び方みたい

なものじゃないかな。今も、神社の近くに小さな札が立ってるよ」

智也は話しながら奥へ進んで、志穂もそれにつづいた。

何年ぶりかで入った墓地は、急に秋が深まったかのようにしんみりと、寒々としていた。

「俺も、本当はあまり来たくはないんだ」

智也が呟いた。

「ここは、入った事はあるかい？」

「ええ、ずいぶん、前に越して来たばかりの頃」

「何か、気付かなかった？」

「何かって？」

「墓石の文字が薄いのがあるだろう」

智也は辺りを見渡すように言った。

墓地の中は、空が晴れているにも関わらず薄暗い風景に映る。それは、黒やグレーの墓石の色と、茂みと木々の深い緑が背景を暗くしているせいなのだろう。

「ええ。でも、風化したんでしょ」

「じゃあ、アレは？」

智也は細い土の通路を入って行った。

志穂もそれに続くように歩いた。

「この墓石はそんなに古くはないぜ」

智也の立ち止まった場所に立つ墓石は、確かにスベスベに研磨加工が施された御影石で、そんなに大昔に建てたものではない事が伺える。

しかし、なんとその墓石の名前の文字は、まるで何十年の歳月を掛けて風化したかのように薄くなっているのだ。

「元々、薄く彫ったとかじゃないの？」

志穂は、そんなはずは無いと思いつつも言ってみた。

「じゃあ、向こうのは？」

智也はあえて指は指さなかった。

志穂は、智也の視線の先を辿ってみた。斜めに四つ先の墓石もピ

カピカなのに、名前が薄かった。

「でも、それがどうしたの？」

墓石の文字が薄い。確かに妙だとは思うが、志穂にはそれが何を意味して、何故そうなのか検討もつかなかった。

智也は再び歩き出した。

「俺は、人一倍霊感が強いわけではないんだ。でも、ここへ来ると、どうにも背中がゾクゾクして、産毛が逆立つような感じになるんだ」「それは、あたしも少しは感じるけど……」

志穂はそう言いながら、自分の両手で両肘を抱えて擦った。

二人は、少し湿った土の通路を奥へと歩いた。

秘密(3)

「ここが、ウチのお墓なんだ」

智也が立ち止まった。大きな柳の木の直ぐ横で、枝の枝垂れが上に覆い被さって暗い影を落としている。仲村家之墓…… 確かにそう書いてあるようだが、その文字は非常に薄く消えかかっていた。

「これを建てたの、何時だと思う」

「お墓の石は綺麗だけど、随分前なんですよ？」

「七年前さ。ここじゃ、かなり新しいよ。その時、隣の墓はもう在ったからね」

智也の言葉に、志穂は両隣のお墓を見比べて驚愕した。

墓石はどう考えても中村家の物より古いが、掘り込んだ文字は、はつきりしていた。

「この墓地は、この世に未練があつて埋葬されると、その思いを遂げるまで文字が消え続けるんだ。思いを遂げられれば、そこで止まる」

「思いを遂げられなかったら？」

「名前の文字は完全に消えるそうだ」

志穂はぞつとした。

ここへ越して来たばかりの頃、この墓地へよく弟の浩志と入って遊んだ。その時、名前の完全に消えた墓石を幾つか見た記憶があったからだ。

風化では無かったのだ。いや、実際に風化で消えているのもあるのだろうが、こうして改めて辺りを見渡すと、文字の薄くなった墓石が必ずしも古いものばかりではない事に気付く。

「未練つて、例えば？」

「殺されたり、自殺したり、とにかく、この世に未練や恨みを残して死んでいった人さ」

「じゃあ、あなたのお爺さんも未練があつたの？」

智也はゆつくりと、小さく肯いた。

「俺の爺さんは自分の土地を全部騙し取られて死んだんだ」

「騙し取られた？」

「新しい大通りがあるだろう」

「大型のお店が並ぶ所でしょ」

智也は肯いて

「あそこの一帯は、ウチの爺さんの土地だったんだ。道路を作る土地は売るが、他は手放さない予定だった。貸しておけば、ずっとお金は入ってくるからね。でも、ごたごたがあつて、知らぬ間に、あの辺一帯は買い占められていたんだ。しかも、道路部分意外はただ同然の値段だったそうだ」

「知らぬ間に、なんて事あるの？」

「不動産の売買は素人には難しい書類が沢山あるからね。俺も、父さえも詳しい事は判らず終いだつたよ。おそらく、仲介の不動産屋もグルだつたんだ」

智也は苦笑いを浮かべながら

「そうでなければ、俺ん家なんてもっとデカくなって、裕福な暮らしだつたらうな」

「それで、お爺さんは？」

「半年後に、離れで首を吊つたよ」

志穂は、どう応えていいものか判らなかつた。肉親が自殺するという事がありにも非現実的に感じるのは、自分の家族がそこそこ幸福である証拠なのだと思うた。

「この薄れる文字は、まだ続いているの？」

志穂が言った。

智也が首を横に振って「四年前に止まつたよ」

それが、どう言う意味なのか、志穂は考えた。

心残り、未練、恨み、それらが無くなった時、文字の薄れの進行がとまる。

土地を騙し取られた智也の祖父は、自分の愚かさに未練があつた

のだろうか。いや、おそらくは自分を騙した関係者に深い恨みを抱いていたに違いない。

道路開発は足早に進められて、あっと言う間に新道が所沢まで開通した。しかし、その道路沿いに大型店舗が軒を連ね始めたのはここ数年の事だというのは、ここへ越してきて五年近く経つ志穂も知っている。

越して来たばかりの頃、何故こんな立派な大通りに殆ど何も無いのか不思議に思ったことを覚えている。父は、それを見て、開発が始まったばかりと話していたが、その後も二年以上何も無い大通りとして有名だった。

「土地売買に関与していた人たちが次々に亡くなったんだ」
智也は話し続けた。

関係者があまりに次々と死んでいく状況のなか、最初に、まだ道路を作っている段階から建設を始めた大型スーパーが出店を取り止めた事によって、密かに呪われた土地として、しばらくの間土地の借り手がつかなかったらしい。

一番乗りした大型スーパーも、その土地の売買に一枚噛んでいて幹部連中が殆ど死んでしまったそうだ。ある者は心臓麻痺、ある者は交通事故で。

土地売買に関わった連中が一通りこの世からいなくなった時、墓石の文字の薄れが止まったと言う。

「当時は、墓参りに来るたびに文字が薄くなっているのが判ったよ」
「誰も不思議に思わなかったの？」

「みんな知っているのさ。ここに埋葬した家族は、だいたいね」
この土地に古くからいた家系は、未練仏をここへ埋葬することによって、仏の未練を解決できると信じている。しかし、それを他人に話す者はいない。

彼岸の時期には多くの家族がここへ墓参りに訪れるが、それぞれにその事を口にするものはいないのだそうだ。

ただ普通に、よく会う者同士は軽く会釈を交わす程度なのだ。

「ちよつとこつちに来て」

志穂は智也を促して、歩き出した。自分の家がすぐ間近に見える所まで来る。

「この辺だわ」

「何が？」

智也は訳が判らず志穂に訊いた。

「夢に出てきたの。友達が」

「友達が？」

智也の問いに肯きながら、志穂は一つの墓石の前で視線を止めていた。

真新しい墓石には太田家之墓と記されていた。

「これ、友達のお墓なの？」

「判らない」

志穂はそう呟いた。

「墓石の裏とかに埋葬された人の名前があるはずだけど」

智也の言葉を聞いて、志穂は墓石の裏側を覗く。

一九八五年五月十二日 - 二〇〇三年九月二十一日 太田千絵
享年十八歳

これは…… 千絵だ。

志穂は思わず崩れるように膝を着いた。

「同姓同名かもしれないよ」

そう言った智也自身、それが慰めになるとは思えなかった。

未練仏

墓地の夕暮れは早かった。周囲に茂った木で囲まれた敷地は、西日を遮る為、夕日が空を染める頃には、辺りは真っ暗に近くなる。

「お茶でも飲んでいく？」

墓地から出て自分の家の前に来た時、志穂は智也に声を掛けた。

二人共黙ったままここまで歩いて来たのだ。

「家の人、いるんだろ？」

志穂は自分の腕時計を見て「お母さんは六時頃帰るかな」

智也も自分の腕時計をチラリと見た。

「じゃあ、少し休ませて貰おうかな」

智也も、志穂の落ち込み様が心配だった。時間はまだ四時半で、

墓地から出た住宅街は思いのほか明るかった。

「なんだか、あそこにいるだけで妙に疲れるよ」

「そうね」

志穂は静かに玄関のドアを開けた。

弟の浩志も学校からはまだ帰っていないかった。たぶん今日もバイトで帰りは遅いのだろう。志穂は智也をリビングに案内して、コーヒーを入れた。

「どうして、世田谷に住む千絵のお墓がここに」

二つのコーヒークップを手に、志穂は呟くように言った。

「あのお墓は新しかったね」

智也が言った。

「ええ、確か、先月の末に納骨をしていたわ」

「新しいお墓は、ここじゃなく、大通りの向こうの墓地へ入れるのが普通らしいけど」

「だから、ここは、ずっと新しいお墓が無かったのね」

「檀家は増やしたいだろうからね」

「ここへ越して来てから初めて見たもの。新しいお墓」

「親の実家なんじゃないの？それに、まだ友達だと決まったわけでも……」

「そうだけど……」

少しだけ沈黙が流れた。

「ねえ、納骨つて、普通、四十九日が終わってからじゃないの？」

志穂が眉を潜めて「二十一日に亡くなって、二十七日に埋葬じゃ早くない？」

志穂はあのお墓の納骨の日を数えていた。

「さあ、俺もそんなに詳しくないし」

智也は彼女が差し出したコーヒをゆっくりとすすりながら

「ただ…… さっきの未練仏だけど、もう一つ話があるんだ」

志穂は自分のカップをテーブルに置いた。

「もう一つ？」

「ああ」

肯いた智也も、カップを置いて

「未練は、仏の未練以外に、遺族の未練も関係するらしいんだ」

「遺族の未練？」

「死に対しての未練だろ」

「死んで欲しくなかったと思う未練？」

「多かれ少なかれ、どの遺族も思うことだと思うけど、事故や病気で若い旦那や子供を亡くしたら未練が大きくなるだろ」

「そうね」

「そういう思いであそこに埋葬してはいけないらしいんだ」

「どういう事？」

「さあね。だから、あの墓地は、基本的には年寄りしか埋葬できないって聞いたよ」

智也の祖父は自殺だったが、年老いていた為と先祖代々の墓があ

そこにあつた為、同じ土地に埋葬できたのだと言う。寺の住職と親しかつた事もあるのだろう。

「昔はそういう未練の多いお墓でいっぱいだったんだそうだよ。噂を聞きつけた遺族が埋葬の依頼に来たそうだよ」

未練仏の噂を知っている遺族が拳つて埋葬に来た為、あつという間に土地がいっぱいになったのだそうだよ。

今以上に、恨み、辛みを残して死んだ者がそれだけ多かったのだ。しかし、全ての未練が、あそこで叶う訳ではない。むしろ、周辺には何の変化も無い事の方が多いのだ。

ただ、智也の祖父の時同様、実際に周辺で不可解な死が相次ぐ事があるのも事実で、いわくつきの遺体は、檀家であつてもあの敷地には埋葬できなくなったそうだよ。その代わりに、大通りの向こうに新たな霊園が設けられたのだ。

とにかく、時折、墓石の文字が消えていくのは確かで、それが本当に遺体や遺族の未練と関係しているかは誰にも判らない。

「あのお墓が千絵のだったって、どうにか調べられないかしら？」

あのお墓が千絵の家のお墓と決まったわけでもないし、太田千絵と言う同年代の女性がこの辺りにいたとしても不思議ではない。誕生日が偶然同じでも、その確率はゼロでは無いのだ。

ただ、志穂は、夢に出てきた千絵の事、自分と里美の前に現れた中学生の千絵の事が頭から離れず、彼女に何か起きたには違いないと思つていた。

「直接お宅へ訊けば？ 友達だったんだろ？」

志穂は首を横に振つた。

「ダメ。何か隠してるのよ。ねえ、お寺に訊いたらどうかしら？」

太田家で会つた「千絵」が何者なのか…… あれは千絵では無い。何故かは判らないが、志穂は強くそう思つた。

「えっ、お寺に？」

「智也のお爺さんと親しかつたんでしょ」

「その住職は五年前に亡くなつたよ。今は長男が継いでいるんだ」

「そうか……」

「一応、訊くだけは訊いてみるよ」

「がっかりとうな垂れる志穂を見て、智也はそう言いながらコーヒを飲み干した。」

「ねえ、じゃあ、今から行ってみよう」

「お寺にかい？」

「気になるじゃない」

志穂に促されて智也は立ち上がった。二人で玄関をでると、外は夕間暮れの薄明かりに照らされていた。

志穂の家の側道を真っ直ぐ進み、墓地の入り口を通り過ぎると少しだけ広い敷地がある。お墓参りの人たちが車を停める場所なのだろう。電信柱に小さな街灯が灯されえている。

墓地伝いに奥まで行くと、左手に神社の入り口があり、既に赤色が茶色に変色した鳥居が立っている。今は大きな黒い影となって夕闇に浮び上っているだけだ。

途中に在った小さな街灯の明かりは既に届かなかったが、薄つすらと濃紺の空が少しだけ明るかったせい、目が暗闇に慣れた為なのか、さほど歩き難くはなかった。

神社の横の竹林を過ぎるとお寺が見える。右側の奥には自宅として住んでいる、平屋だが割と大きな家が見えた。

智也が仲村の孫であることを継げると、快く歓迎してくれたが、太田家の墓については、やはり詳しく知ることは出来なかった。ただ、分家が世田谷に在り、その娘さんのお墓だと言うことは教えてくれた。

世田谷区に太田千絵と言う名は何人いるのだろう。志穂はそんな事を考えながらお寺を後にした。

智也は志穂の家の前まで来ると

奥津城（おくつき）

「それじゃあ」

と手を上げてバス停の方角へ歩いて行った。

教師

星が瞬くような晴れ渡る夜空の下、深夜の三時になろうとしていた。

大通りの真ん中に、警察車両の事故処理用のバンが止まっていて、車の屋根に装備された電光掲示板には「事故処理中」という文字が発光していた。

「妙ですよね」

事故現場に駆けつけた交通課の杉本巡査が言った。

運転していた男は既に救急車で運ばれて、大破した車だけが現場に取り残されていた。

「エアバッグの故障はともかく、シートベルトが切れるなんて」

同じく交通課の斉藤は巡査部長だ。

事故車のシートベルトは鋭利なもので切られたのでは無く、千切れたような切れ方をしていた。通りかかった者からの通報で駆けつけた警察官が見たものは、フロントガラスを突き破った運転手の姿勢と、切れたシートベルト。

ベルトを装着する留め具はしっかりとハマッたままだったそうだが、事故の衝撃で切れたんでしょうか？」

杉本巡査が言った。

それを聞いた斉藤は

「さつき車検証を見たが、六ヶ月点検が終わったばかりの新車だぞ。そんなことありえない」

「運転していたのは学校の先生らしいです」

「教師？」

「坂町巡査の息子さんが通う学校で、見覚えがあると言っています」

「何時ごろ起きた事故か判るか？」

斉藤は書類を捲りながら訊いた。

「彼の腕時計が、二時十分で止まっていたそうです。おそらく、事故の衝撃で時計が止まったと思われます」

杉本巡査は、到着したレッカー車に手を上げながら

「シートベルトが切れなければ助かったでしょうね」

「そうだな。最近の車は安全基準が高い」

齊藤は運転席の大きく歪んだハンドルと、頭の形に穴の開いたフロントガラスを交互に見つめて言った。

その日、志穂が学校に着いた時、教室の中は既にその話題でも切りだった。

「ねえ、聞いた？英語の柴田」

自分の机に着いた志穂に、里美が直ぐに声を掛けて来た。

「柴田がどうしたの？」

「事故で死んだって」

里美の話し方は、少しだけ気の毒がっている表情をしていたが、好奇心に満ちていた。

「事故って？」

「交通事故。直線の道路でいきなり中央分離帯にぶつかったんだって」

柴田は見通しの良い大通りの直線で、中央分離帯に激突して、車は大破し本人は即死した。

「エアバッグが開かずに、しかもシートベルトが切れてたんだって」

「そんな事ってあるの？」

志穂は車を運転するわけではないのでそんなことに詳しいはずも無いが、父親の車に乗った時に、装着するシートベルトがそう簡単に切れそうもない事ぐらいは知っていた。

柴田が授業を受け持つクラスには担任教師から説明があり、彼の死を実感した。

朝のニュースで見た者、新聞で読んだ者と、話題の根源は様々だったが、直に同僚の教師の口から聞く事が、何よりも真実味があったのだ。ただ、シートベルトが切れていた事については語られなかった。その話は何処から来たのか。

事は簡単で、事故処理にあたった警官の一人が、隣のクラスにいる生徒の父親だったのだ。

警察官を職に持つ者は普段、自宅で仕事場の話は殆どしないそうだが、それだけ今回の事故を不可解に感じたのだろう。

放課後、志穂はクラス委員の由美子に付き合って資料室に行った時、職員室の前で見知らぬ男を見かけた。

「ご苦労さまでした」と学年主任と教頭が頭を下げている。

「いえ、不幸な事故だったと思います」

見知らぬ男もどうやらその喋り方から、教員らしい事がうかがえた。

「あの人、何だろう」

志穂は何気なく由美子に訊いた。

「ああ、成田高校からお悔やみに来たみたいよ」

「お悔やみ？」

「柴田でしょ」

「柴田って、成田高校から来たの？」

「確か春に就任した時、そう紹介されたわよ」

「世田谷の？」

「そうだったと思うけど」

由美子は怪訝な顔を浮かべ

「それが、どうかしたの？」

「うづん。別に」と志穂は応えておいた。

世田谷の成田高校は確か千絵がいた学校だ。もつと早く知っていたら、いや赴任して来た時の紹介をちゃんと聞いていなかった自分が悪いのだ。でも、千絵の事を訊いてみたかった……何か知っていたかもしれないのに。

そう考えると志穂は、柴田の死が急に悔やまれるものに感じるのだった。

暗闇

その夜、眠っているはずの志穂は焼香の香りを感じていた。

「まただ……」志穂は眠りの中で思った。

目を覚ましたわけではない。しかし、はっきりと線香の匂いがした。レム睡眠とノンレム睡眠の切り替えが起こったのかもしれない。意識が目覚めそうで、しかし目覚めない。そこから深いまどろみに落ちてゆく。

暗闇に包まれて広い大通りが見える。辺りは寒々とするほど殺風景で、あちこちに水銀灯の明かりが見える。四角い大きな黒い山は、何かが積み上げられているようだ。

微かな汐の香りは海が近いのだろうか。何かの事務所のような小さな建物が見えるが、ブラインドウが閉められ、明かりはついていない。

直ぐ横に立つポールの先に、大きな時計が見えた。

グリーンの照明に浮き出るような文字盤のアナログ時計だ。よく最近の駅のホームにあるものとよく似ている。

志穂は目を細めてそれを見つめる。時計の針は二時五分を指していた。この暗さ、この静けさから考えても、深夜の時間だろう。

ここはいつたい……

静けさの中から何かが聞こえて来た。目の前がフラッシュライトで照らされたように眩しい光で包まれた。

志穂は思わず目を細めるが、光の中に何かが見えた。

「千絵……」

直ぐ隣に誰かがいる。柴田だ……

「先生、どうしよう」

「大丈夫だ、心配するな」

「でも、三カ月だって」

「お母さんには話したかい？」

「言えるわけないよ」

「そうか、そうだな。しばらく黙っていた方がいい」

「あたし、不安で。先生、産んでもいい？」

「千絵がそうしたいなら、僕が責任をとろう」

「ほんと？」

「ああ、だから、何も心配はいらないよ」

柴田が優しい笑みを浮かべながら、千絵を抱き寄せる姿が光の中に映し出されていた。

光は一端消え、暗闇が広がる。さっきの道路の風景が薄っすらと浮かんできた時、再び発した光が志穂の目の前を覆い千絵の姿が浮び上った。

「千絵！」

柴田が千絵の首を紐のようなもので絞めている。いったい何が起きたのか……

とにかく助けなきゃ。

志穂は足を踏み出して身体を前に進める。が、光の中の千絵と柴田との距離は変らなかつた。

「どうなってるの？ 千絵！」

千絵はもがいて暴れていた。彼女の首筋に紐が喰い込んで、肌にシワが寄っている。

柴田の顔……それは、戸惑いと焦りが混濁しながらも、悲しみと憎悪に満ちたような恐ろしい形相。

志穂が見た事も無い彼の顔だった。

千絵は大きく暴れて、足を上げて柴田の身体を蹴飛ばした。その時、彼の手が千絵の首から離れた。

一瞬の隙を突いて彼女は車から飛び出した。

志穂はそれが車の中で起きていた事だと初めて気づいた。

千絵が志穂に向かって走って来た。

「千絵！」

志穂は思わず両手を前に突き出した。

千絵が自分の腕の中に飛び込んで来るような気がしたのだ。眩しい光が消えた。しかし、後には柴田の運転する車のヘッドライトが迫っていた。

息を切らして走る千絵の顔がはつきりと見えた。必死だ。何とかして、どうにかして彼女を助けたい。

千絵は無我夢中で走っていた。景色も流れているのに、志穂と千絵の距離は一向に縮まらなかった。

「千絵、ここまで来て。早く！早く！」

志穂は叫んだ。それが千絵に届いているかは判らない。縮まらなかった距離が急に接近した。

あと少し、もう少しで彼女に手が届く。

「千絵！」

「志穂」彼女は確かにそう声に出した。

その小さな呟きのような声は志穂の耳にも届いていた。

千絵の身体に志穂の手がもう少しで触れる、あと少しで抱き留められるというその瞬間、後から千絵の身体が跳ね飛ばされた。

柴田の車が跳ね飛ばしたのだ。志穂も一緒に弾き飛ばされた。

彼女には訳が判らなかった。

身体が浮き上がった。しかし、痛みはなかった。

千絵は大きく弾き飛ばされたまま、その勢いでガードレールに全身をぶつけ、人形のように転がった。

千絵の頭部から流れ出た真っ黒い血溜まりが、水銀灯に照らされてみるみる広がっていく。

志穂はフカンの視点で千絵を見下ろしたまま身動きが取れなかった。

さつき見た大きな時計の針は、二時十分を指していた。

柴田の車が長い直線道路を走り去り、右に曲がって消えた。そして、またフラッシュのような激しく眩しい光。

手で顔を覆う事が出来ない。まるで、身体が無いようだ。目の前の眩しい光は点滅を始めた。

「もうやめて。あたし、どうすればいいの？」

志穂は叫んでいるつもりでも、声は出ていなかった。

ライトの点滅が次第に早くなって、その光が突然消えると、そこは何も無い闇だけが広がっていた。

自分が何処に立っているのか、周りに何があるのか、空はどうなっているのか、外なのか室内なのかさえわからない。

そもそも自分は本当に何処かに立っているのだろうか……地面を踏んでいる感覚が無い。

漆黒の闇で自分の身体さえ見えはしない。

焼香の臭いが強くなって、まるで目の前で線香を焚かれているようだった。

もしかして自分も死んでしまったのか。知らぬ間に死んで、自分では理解できないでいるのだろうか。

焼香の煙が勢いを増して、やたらと煙たくて目が痛くて、咳き込んで……

志穂はひどく咳き込みながら不意に目を見開いた。

何も無い闇は消え、目の前には見慣れた風景。自分の部屋だ。目が覚めたのだ。カーテンの隙間から細く光が差し込んでいる。

「夢だ………あたしは死んでない」

志穂が自分の顔に手を当てると、頬を伝った涙の跡がまだ濡れていた。

その涙が、線香の煙たさで出たものなのか、千絵の死をみて流れたものなのか、彼女には判らなかった。

それとも、自分が生きていたと認識してから流した歓喜の涙なのだろうか。

呪縛（1）

あの夢、アレは何だったのか。柴田と千絵が付き合っていた？
そんな……

しかも、アレは妊娠していたと言う事だ。あの夢の流れだと、妊娠した千絵の口を封じる為に、柴田は何処かで千絵の首を絞めて殺そうとして逃げられた為、車でひき殺したんだ。二時十分……そうか、千絵が殺された時間だったんだ。

志穂はリビングへ行って、古い新聞を漁り出した。ひき逃げ事件なら新聞に載るだろう。以前、志穂が里美に千絵の写真を見せた事があった。その時彼女は、千絵が死んでないかと訊いてきた。

里美は靈感が強いから、おそらく、千絵の写真から何かを感じ取ったんだ。

「どうしたの、急に」

朝から新聞を漁る志穂を見て、母親の文江が声を掛けた。

「お母さん、他の古い新聞は？」

古紙を入れるボックスがやたらとキレイになっていた。

「先週古紙で出したわよ」

志穂はがっくりと肩を落として、息をついた。

「古い新聞なら図書館にあんじゃないの？」

目玉焼きを頬張りながら浩志が言った。

放課後、志穂は市立図書館へ立ち寄った。

里美と由美子、そして玲子もついて来た。「夢で見た話なんて里美意外は、そう言って半分失笑していたが、結局ついて来た。」

「一人で探すのは大変でしょ」由美子が言った。

玲子は「今日は暇だから」と言っていた。

退院はしたものの、左腕をギブスで固めているので、習い事は全て休んでいて、さすがの玲子も暇で仕方がないらしい。

四人は手分けして新聞の小さな記事に目を通す。墓石に記された命日は九月二十一日になっていたから、そこから四、五日さかのぼって新聞を捲った。

「まったく新聞の記事って、面白みに欠けるわよね」

玲子が右手だけで新聞をめくりながら呟いた。

「なんだか目がチカチカする」

普段新聞などまったく読まない里美が言った。

窓から差し込む陽射しはみるみると陰り、夕暮れの低い太陽が向かい側の建物に遮られた頃、由美子が声を上げた。

「これじゃない？」

もう館内にはほとんど人がいなかったため、あまり声に気を使う必要が無かった。

由美子は他の連中に見え易いように、広げた新聞を長テーブルの中央にずらした。

【世田谷区に住む高校生の太田千絵さん（18）がひき逃げにより死亡。】

記事は小さいものだった。九月二十日から行方の判らなかった少女が、二十一日早朝、品川埠頭にある貨物輸送業者の、休日出勤してきた従業員により遺体で発見された。

車に跳ねられた形跡があることから、ひき逃げと断定し捜査するらしい。しかし、その後の続報はいつころに見つからず、唯一由美子が見つけたこの記事だけが手掛りになった。

やはり、あのお墓はあたしの知っている太田千絵のものに違いない。

千絵は柴田に裏切られた仕返しをしたのだろうか。それなら、千絵の母親が「千絵」と呼んでいたアレは……あたしが見たアレはなんだろう。

志穂は、あの青白く紫がかった生気の無い千絵の顔を思い出すだ

けで、背筋に悪寒が走るのだった。

翌朝、とりあえず学校に行った志穂だったが、昼休み中に早退して、再び千絵の家に向かう為、そのまま駅から電車に乗り込んだ。確かめなければ。そう思うと、いても立ってもいられなかった。里美や由美子には心配をかけたくなかったので、黙って出てきた電車に乗ってからメールを打った。

志穂は電車の中で考えていた。成田高校は、千絵の家の一つ手前で降りる。

そつだ、学校で訊いてみよう。

彼女は千絵の家に向かう前に、手前の駅で下車した。

駅前商店街を抜け、住宅街に面した通りを少し歩くと学校は在った。引越しが無ければ、志穂も千絵と一緒にこの学校へ来ていたのだろう。

志穂はためらう事無く校舎に入ると、職員室を探した。

ドアは開け放たれていたが、入り口でノックをした。授業中と言う事もあり、職員室の中はガランとして、数人が残っているだけだった。

「どうぞ」と言う声で中に入る。

「あなた、ここの生徒じゃないわね？」

志穂の制服を見て、若い女性教員が立ち上がった言った。

「はい、あの…… 太田千絵はこの生徒でしょうか？」

志穂は臆する事無く訊き返した。

「太田千絵？」

少し奥にいた男性教員がこちらを見つめていた。先日職員室前で志穂が見た、お悔やみに来ていたらしい教員だとすぐに気が付いた。年格好から言つて、教頭かも知れない。若い女性教員は、その男の教員の方へ目をやった。

「キミは何処から来たんですか？」

男性教員が立ち上がった。「私は、ここの教頭で、五十嵐と言います」

「わたしは、音楽を教えている澤田です」

女性教員が続けて言った。

「あ、あたし、片山志穂と言います。太田千絵とは、あたしが転校するまで親友でした」

その後、志穂は応接室に通された。と言っても、職員室の片隅を衝立で仕切っただけの場所だったが。

「残念だったわね。あんな事になって」

澤田が顔を曇らせて言った。

「やっぱり、亡くなっただんですね。千絵」

「ご存知なかったの？」

「ええ、新聞で見え。ひき逃げって、本当ですか？」

澤田は少しだけ、千絵の死について知っている事を話してくれた。「彼女の自宅には行ってないの？」

志穂は、どう応えていいのか判らなかった。自宅に行ったら千絵がいました。とは、とても言えない。アレはやはり千絵ではないのだ。

「こ……これから行こうと」

志穂はそれだけ言うのと立ち上がり、会釈をして応接室を出た。五十嵐が奥の自分の机で電話に向かって見えているのが見えた。

あたしの学校に連絡しているのかもしれない。志穂は直感でそう思い足を速めた。

呼び止める声が後ろから聞こえたが、彼女は立ち止まる事無く足早に廊下へ出て玄関を抜けた。

呪縛(2)

志穂は来客用の正面玄関から出た為、昇降口の横を通って正門へ向かっていた。

「片山」

後から誰かが走ってくる足音と共に呼びかける声。教員のものでは無い。もっと若い同年代の声だった。

「充彦」

綱島充彦が昇降口から駆け出して来た。彼は、千絵と同じく、志穂が世田谷の中学にいたときのクラスメイトだった。

「後ろ姿がどうもお前っぽくて、追いかけて来たんだ」
充彦は息を切らせながら言った。

「あたしって、そんなに変わってないかな？」

志穂は髪を、少しかきあげた。
「変わっても俺にはわかるんだよ」

志穂は充彦の言葉が嬉しかった。充彦は中学時代一番側にいた男の子だったからだ。

転校する際、充彦との別れが、千絵との別れよりもある意味辛かった。女同士なら何時でも会えるという考えがあるが、彼氏彼女の関係でもない充彦とは、もう会えないのだという思いが志穂の中にはあったからだ。

「髪伸ばしたんだね。野球辞めたの？」

充彦は中学時代丸刈りだった。その丸刈りで笑う笑顔が、志穂は好きだったのかもしれない。

そうか、智也の笑顔は充彦に似てるんだ。目鼻立ちは違っているのに、その笑顔が醸し出す雰囲気似ているのだと志穂は感じた。

駆け出して来た彼の黒髪は、耳を半分隠して、風にそよいでいた。
「今はサッカーだよ」

充彦はそう言って笑った後、顔を曇らせて

「千絵の事……」

志穂は、彼の言わんとする言葉を察して肯いた。

「あんな事になるなんて」充彦がポツリと言った。

「柴田って教師、ここにいたの？」

「柴田って、事故で亡くなった柴田かい？」

「うちの学校にいたのよ」

「片山の？　そうか、変な偶然だな」

「ねえ、柴田先生と千絵は付き合ってたの？」

「充彦は少し驚いた顔で「何で、それを？」

「やっぱり付き合ってたのね？」

「そんな噂はあったよ。でも、確かな事は判らない」

その時、六時間目の修業のベルが鳴った。

「やべ。じゃあ、俺行くよ。会えてよかったよ」

充彦はそう言って、手を上げながら昇降口の中へと消えて行った。

志穂はただ笑ってそれを見送るように手を振った。

また会いたい。そんな気持ちは何故か沸き起こらなかった。

駅へ向かいながら志穂は携帯電話を掴んでいた。

千絵の家にかけてみよう。携帯のメモリーから番号を呼び出して
通話ボタンを押す。コール音が鳴っている。数回のコール音が異常
に長く感じた。

「はい」向こうの受話器が上がった。

「もしもし、片山志穂です」

「ああ、このまえは、わざわざありがとう」

「あのう……」

「どうしたの？」

千絵の母親は心成しか穏やかな口調だ。

「あのう、千絵の具合はどうですか？」

「ええ、まあ、あの通りだから、気長に構えるしかないのよ」

「千絵は……千絵は九月に死んだんじゃないですか？」
少しの沈黙があった。

「何を言ってるの急に？ 千絵は今も部屋で休んでいるわよ。この前会ったでしょ」

「千絵が、あたしの所に来るんです」

志穂は歯止めが効かなかった。

「未練仏の墓地に千絵を埋葬したんじゃないですか？」

「千絵はここにいます。ここにいる千絵が本当の千絵なの。お墓に入れたのはただの骨の燃えカスよ。ここで千絵は生き返ったのよ」
母親の口調が激しくなっていた。

「やっぱり、千絵は死んだんですね」

「違うわ、ここにいるもの」

「おばさん、そこにいる千絵はちがうよ。そんなの千絵じゃない」

「あたしはね、姿、容のある千絵がいいの。お墓に入ってしまったら傍にいられないじゃない」

その時、電話の向こうの彼女は、瞬き一つしない、麻色の腐敗しかけた顔で傍に佇む娘を抱きしめていた。

狂っている……やはり千絵は禁断の墓地へ埋葬されたのだ。墓地の力で蘇えったと言うのか……いや、あれは全く違う、別の何かだ。
「おばさん、だめだよ。千絵を成仏させてあげなきゃ、かわいそうだよ」

志穂の目から涙が零れた。

「あたしがいいって言ってるの。主人も賛成してるんだから、もう家に構わないで！」

電話はいきなり切れてしまった。

遺族の強い未練が、あの家に千絵に似た何かを創らせたのだ。柴田への憎しみに終止符を打った今、千絵は、彼女は成仏したいはずだ。

志穂は千絵の家へ向かう電車のホームへ降りた。

違う……千絵の家に行っても解決しない。墓地だ、あのお墓を何とかしなければダメなんだ。

志穂は引き返して階段を駆け上り、駅の歩道橋を渡って反対側のホームへ降りると、上り電車に飛び乗った。

智也、そうだ、彼なら助けになるかもしれない。まだ授業中の時間だったので、志穂は電車の中から智也にメールを送った。

解放

「仲村」

部活をサボって、学校の裏門からそくさと帰ろうとしていた智也は、里美と由美子に呼び止められていた。

「なんだよ、ビックリしたな」

「あんだ部活は？」

里美が智也に訊いた。

彼は一年の時からレギュラー入りしていて、滅多な事で部活を休まない。

「いや、爺ちゃんが危篤で……」

「仲村のお爺さん、ずっと前に亡くなったでしょ」

由美子が言った。

「この前も部活休んで、志穂に会ってたわね」

智也は二人の女性に詰め寄られ、思わずたじろいだ。

「志穂は今、何処にいるの？」

里美はさらに一步、智也に迫って訊いた。

智也は彼女達が、志穂とは親友と呼べる仲だと言っ事を知っていた。だから、話さない訳にはいかないような気がした。

彼は渋々、志穂から連絡があった事を話した。

「じゃあ、あたしも行くわ」

里美が言つと、由美子も「あたしだつて」

「そんなにぞろぞろ行つても……」

智也が困惑していると

「どうしたの、こんな所で？」

後に玲子が立っていた。

「また増えたのか……」智也が呟いた。

ふと道路に目を向けると、白い大型のベンツが停まっていた。

玲子はいつも送り迎えの車を裏門に着けるようにしているのだ。

たまたまそこに、智也たちがいただけで、玲子は何時も通りの行動をしていただけだった。

一瞬由美子と顔を見合わせた里美は

「ちょうどいいわ、玲子、志穂の家まで連れて行って。理由は話すわ」

志穂が駅からバスに乗って自宅近くのバス停で降りた時、智也が既に待っていた。

しかし、その後から里美が現れた。

「里美……」

そして、すぐ脇に停まっていたベンツの後部座席から、由美子と玲子が降りてきた。

「あたし達も協力するよ」

里美が言った。

「ありがとう、でも……」

志穂はためらった。正直、友達とはやはり良いものだと思った。

「じゃあ、玲子と由美子はここで待っていてくれる？何かあったら呼ぶわ」

「何かあって？」

由美子が訊いた。

「判らない。何が起るのか判らないから……」

志穂はそう言うてから「里美は一緒に来て」

三人は志穂の家の裏へ向かった。千絵の墓石のある墓地へ。

「どうしたんだ、いったい。未練仏の呪縛から開放する方法を教えるなんて」

「やっぱり、あれは友達のお墓だったの……」

「そうか」と智也は肯いて

「おまえ、今日、午後から何処に行ってたんだよ」

志穂は大まかな経緯を話した。千絵が柴田と付き会っていた事。そして妊娠し、おそらく柴田に殺された事。そしてまた、柴田を殺したのも、未練仏として埋葬された千絵であること。しかも、今現在、千絵の家には、千絵にそっくりの「何か」がいる事。

「やっぱりあの娘、死んでたのね」

里美が呟いた。

「でも、あの柴田と関係が……」

智也は複雑な表情で呟いた。

日は陰り夕闇が辺りを包み始めていた。

「それで、そうすればいいの？」

次第に足早になりながら志穂が智也に訊いた。

「母親に訊いてきたけど、はっきりとは判らないらしいんだ。ただ、お墓から御骨を取りだして供養すればいいんじゃないかって言ってたよ」

「御骨を？」

「未練仏は御骨が効力を持つらしいんだ。昔は土葬だったから、その力をもっと強かったんじゃないかって。母親も爺さんから聞いた話だけ」

三人はとりあえず墓地へ入った。

「うっ……」

里美が墓地の入り口で立ち止まった。

「どうしたの？」

志穂が訊いた。

里美の顔色が真っ青になって「凄い…… 何、ここ」

「大丈夫？」

「ごめん、あたし、入れそうもないよ」

里美は足を竦めながら言った。

「大丈夫、ここで待ってて」

里美が肯いたのを見て、志穂と智也は少し身構えながら墓地の中へと進んで行った。

奥津城（おくつき）

後から里美が小さい声で「気を付けて」

光

「あいつ、どうしたんだ？」

智也が心配そうに訊いた

「里美は靈感が強いだよ。かえってマズかったみたい」

志穂は靈感の強い里美が何かの役に立つかもしれないと思い、一緒に来てもらったのだ。しかし、未練仏の眠る墓地が放つ邪悪な靈気に耐え切れず、立ち往生してしまった。

「死んだその娘が自分の家にいたって、どう言う事だよ」

駆け出す勢いで足早に歩く中で、智也が言った。

志穂は正面を向いたまま

「知らないよ。いたんだもの。でも、生きた人間にはとても見えなかったわ」

そう言った志穂の横顔を見ながら、智也は不安げに

「何だよ、それ……」

薄つすらと明るい空から三日月が照らし出す千絵の墓石は、文字が半分消えかけていた。

「こんなに消えるのが早いなんて……」

墓石を見た智也が、驚きを露わに呟いた。

「骨壺はどこに？」

志穂は墓石の土台周辺を探した。

「俺だって、あまり詳しくはないんだ」

智也も一緒に土台の石段を探る。

「動きそうな蓋があれば、たぶんそこだ」

二人は、あちらこちらを手で触って確かめる。右端の蓋の中にはお彼岸に使う湯飲みや皿が入っていた。

「他に無いよ」志穂が投げ出すように呟く。

墓石の土台になっている石段の左に小さな裂け目があった。

「これだ」と、智也は指をかけて引つ張り出す。梅干を漬けるような大きな瀬戸の容器が顔を出した。

「千絵」

志穂が思わず呟く。

「片山が持つかい？」

智也が骨壺を見入る彼女に言うと、志穂は大きく肯いた。智也は骨壺を志穂に渡すと、石の引出しを元通りに押し込めた。

その瞬間、墓石が根元から折れてゆっくりと後に倒れた。まるでスローモーション映像でも見ているかのように、それは二人の目に映った。

倒れた墓石は囲いの石壁にぶつかって大きな音を立て、真つ二つに折れ、折れた部分の細かい破片が周囲に転がった。墓石が揺らいだ瞬間、驚いて後に尻餅をついた智也は、立ち竦んでいた志穂に促されてその場を後にした。

「あれ、なんだ？」

小走りで墓地を抜けながら、智也が言った。

「判らないわ。もう、未練仏の墓石の役割は終わったって事じゃない」

志穂は、千絵の骨壺を抱いたまま、息を切らしながら応えた。

「どうしたの。凄い音がしたわよ」

駆け足で墓地を出ると、里美が待っていた。志穂は肩で息をしな

「墓石が崩れたの」

「墓石が？」

三人は路地を抜けて志穂の家の前まで来た。

「これを、千絵の家に持っていかないよ」

智也は大きく息を吐きながら「今から？」

「だって、あたしの家に置いとく訳にいかないでしょ」

「それはそうだけど……」

里美は怪訝そうに志穂の抱える骨壺を見つめていた。

志穂は呼吸を整えようと大きく息をついて

「それに…… 千絵の家にいる『千絵』はどうなるのかしら」

「死人が蘇えるなんて、とても信じられないけど」

智也は呟いた。

里美はじつと骨壺を見つめていた。彼女には、そこから発せられる青い光が薄っすらと見えていた。

軽い唸りをあげて、玲子の白いベンツが滑り込んできた。

「志穂」

車の後部の窓が開いて、由美子が「心配だからここまで来て見たの」

「助かった。タイミングバッチリよ」

と志穂は笑って見せて「玲子、今からこの場所に行ける？」

志穂が言った住所を玲子が運転手に告げると、軽く肯いて見せた。

「でも、この車って五人乗りでしょ」

由美子がそう言い終わらないうちに、みんなで乗り込んだ。智也

は助手席に、女性四人は後部座席にすし詰めに入り込んだ。

確かに後部座席の定員は三名だが、四人とも女性としては標準体型だったので、欧州向けに作られたシートは十分に座る事が出来た。

大柄だがエンジンも大きい為、フル乗車、いや、定員オーバーにも関わらず、ベンツは猛スピードで世田谷に向かった。

焼跡

千絵の家の周辺に來ると、志穂が道案内をしながら住宅地を抜けた。銀杏並木の通りを抜けた時、ふと、焦げ臭い臭いが鼻を突いた。「なんだろう」

里美が言うと

由美子が口を開いて「火事かな？」

その臭いは、志穂が案内する方向に近づくにしたがって、次第に強くなっていった。

通りの角を曲がった時、路地の先に幾つもの赤色に輝く回転灯が見えた。火の手は既に見えなかったが、消防車から伸びる白いホースが、何本も路上を這っている。

「あそこかな、火事」

智也が身を乗り出すようにして言った。

放水作業はもうしていないかった。数人の消防士がホースを巻き取ったりしている。

「これじゃあ通れ無いわね」

玲子の言葉に、志穂が

「通らなくていいよ。あそこだから」

智也が少し驚いて後を振り返った。

志穂には判った。路地を曲がった瞬間に、消防車が止まっているのは千絵の家の前だと言う事が。

何故だか判らないが、隣や周辺の家だとは思わなかった。燃えたのは千絵の家に違いはないと思った。

「ここで止めて」

志穂は冷静な口調で言った。

消防車が数台、パトカーが二台止まっている少し手前で車を止めた。辺りは、緊急車両の赤色灯に照らされて真っ赤に映し出されていた。

「まさか……」

智也が声を掛けた時、志穂は既に骨壺を抱えたまま車を降りていた。智也も車を降りて志穂を追った。

二人は赤色に侵食された景色の中を駆け抜けた。

里美も智也に続いて車を降りようとした時

「ここにいきましょう」

玲子がそう言って、スモークの窓を全開にした。

里美はその言葉に従い、開けかけた左のドアを再び閉めた。

三人は息を呑んで、志穂と智也の後ろ姿を見守った。

「大丈夫かな、志穂」

由美子がそう呟いた時

「この辺の方？　ここに止められると困るな」

警官が窓の外から運転手に声を掛けて来た。

激しく立ち込める焼け跡の臭いが鼻を突いた。

化学繊維やプラスチックなどの石油精製品の溶けた臭いと、木造家屋の焼けた臭い。そして、おそらく一緒に焼けたであろう人体が、異臭を放っているのかもしれない。

庭を囲むブロック塀は残っていたが、二階部分は完全に焼け落ちて、一階部分も崩落し、家の姿はなくなっていた。

真つ黒に焼け煤けた柱と梁が数本と、僅かな壁が残っていた。あちらこちらから、白い煙が僅かに立ち昇っている。

あたり一面は延焼を防ぐ為にしきりに放水された水で池のようになっでいて、道路脇の排水溝に、けたたましく流れ込む水の音が聞こえる。

さっきまで燃えていた炎が発した余熱が、アスファルトをも熱くさせていた。

鎮火した為、やじ馬も減ったのか、辺りの住人がうろついている

意外は、消防と警察官だけだった。

「あなたが第一発見者？」

「ええ、私が火の手を見て直ぐに通報したんですが。三十分やそこらでこんなになるもんですか？」

消防員と近隣の人の話す姿が見えた。

その横では壁の焦げた隣人宅の住人が、アレの修復はどうなるのかと、消防士を捕まえて訊いている。

「危ないから近寄らないで」

警備の警官が促す。

門の在った入り口の傍まで志穂は近づいていたのだ。

志穂はその時数メートル先、ちょうど千絵の家と道路の境目辺りに落ちているモノに目が止まった。彼女はとっさに警官の横を擦り抜けて手を伸ばした。

「こら！ 危ないだろ！」

落ちていた物を掴んだ時、志穂は警官に取り抑えられた。彼女は拾ったものを素早く上着の内側へ隠した。

「すみません、悪気はないんです」

智也が、慌てて後から警官の肩に手を掛けて、宥めるように声を掛ける。

「キミもこっちに入っちゃいかんよ」

志穂と智也は乱暴にその場から押し出された。

志穂はそつと上着の内側から、今拾い上げたモノを取り出す。彼女が必死で拾い上げたモノ。それは、一枚の写真だった。

千絵と志穂が二人で無邪気に笑う写真。

中学二年のとき、日光へ遠足に行った時のものだと、志穂にはすぐに判った。

周辺が少しだけ焦げていたが、何もかも全てが焼き尽くされた中で、それは奇跡的に燃え残ったのだ。

「千絵……」

志穂の目から大粒の涙が零れて、それは止まらなかった。

智也は少しだけおどおどして

「おい、大丈夫か？」そう言っつて、志穂の肩に手を掛けた。

「うん。大丈夫。少しの間、放っておいて」

最後に千絵に会った時、新宿の駅構内で志穂は別れ際に

「じゃあ、またね」そう言った。

じゃあ、また…… それは叶わなかった。この先も永遠に叶わないのだ。

赤色灯の明かりが照らし出す焼け跡に漂う、つんと鼻を突く臭いと、それを取り巻きながら事務的に動き回る消防員や警官達を背景に、志穂は写真と骨壺を抱きしめて小さな子供のように声を出して泣いた。

志穂のポケットの中で携帯の着信音がしきりに鳴っていた。

里美、由美子、玲子の三人は、生暖かく焦げ臭い風が吹き抜ける車の中から、ただその光景を静かに見つめる事しか出来なかった。

三人の頬には同じ雫が光っていた。

「志穂、大丈夫かな……」

由美子が鼻を噉りながら呟いた。

「大丈夫だよ」

玲子が言った。

里美には、志穂が大事に抱える、あの骨壺から発せられていた微かな光は、もう見えなくなっていた。

エピソード

あの晩、しきりに鳴っていた携帯電話は母親からのものだった。何の連絡も無く夕飯の時間まで帰らない志穂を心配してのものだった。

帰りの車中、気持ちを切り替えて言い訳を考えても、何も思い浮かばなかった。かといって、全ての真実を話しても、父や母がそれを信じてくれるとはとても思えなかった。だから結局、みんなでカラオケに行っていた事にしたのだった。

何故か智也は、志穂の家まで来て一緒に謝ってくれた。

もちろん、他の連中も、家への連絡を忘れていた為、それぞれに怒られたそう。一人、玲子だけは、どうとでもなったらしいが。

千絵の家の焼け跡からは、二つの焼死体しか発見されなかった。勿論、父親と母親のものだろう。

千絵の死亡届は既に提出されていた為、それは無くて当然なのだ。もともと、あの家には彼女の母親と父親、人間は二人しかいなかったのだ。

千絵の家の中で嗅いだ焼香の匂いは、おそらく千絵の為に母親が絶やさず焚いていたものだろう。

火事の原因については特定しかねているそうだが、室内からの失火の可能性が大きいと言う。たまた、ガソリンや灯油などの痕跡は検知できず、それにしてもあの燃え方は異常だと言う事だ。しかも、あれだけ勢いのある炎が、隣に延焼しなかった事も珍しいと言っていた。

短時間であの家だけが、丸ごとぽっかりと焼け落ちたのだから。千絵が全ての後始末をしたのだろうか。

それとも、母親か、あるいは父親が、千絵を成仏させてやりたか

ったのかもしれない。

全てが灰となってしまうた今、それは誰にも解らないのだ。

千絵の御骨は親戚の方が引き取り、両親と一緒にのお墓が新たに造られるそうだ。

千絵をひき殺した柴田は、犯行時に使用したレンタカーのキズの塗膜から、容疑者として割り出され、彼が事故に遭った日、既に内定捜査は終了して検挙の日を検討していたらしい。

柴田は、本人死亡のまま、ひき逃げの罪で書類訴権された。

数々の疑問の中で、ふと志穂は考えた。

後から思い起こせば、柴田が死ぬ随分前から千絵は志穂に助けを求めるメッセージを送ってきた。

柴田を殺したいなら、それを成し遂げた後でも良かったのではないのか。

もしかして千絵は、本当は柴田を殺したくは無かったのかもしれない。

未練仏の呪縛に囚われた彼女の魂は、憎悪と愛情が交錯して、自分でもコントロール出来なかったのではないだろうか。

それを志穂に止めて欲しかったのかも知れないのだ。

だから、中学時代の、純粹だった頃の姿で現れたのかもしれない。志穂はそう思うと、結局千絵には何もしてあげられなかった自分に、悔しさと、腹立たしい思いが同時に沸き起こるのだった。

片山家の裏に広がる墓地では、今も尚、それぞれの思いが込められた墓石たちが文字を消し続けている。

日々訪れる誰かの死のどれかは、未練を残して消え続ける墓石がもたらしたのかもしれないのだ。

千絵の家が焼け落ちてから一週間が経ち、太田家の新たなお墓の場所が決まった頃、志穂の携帯電話に一通のメールが届いた。

そのメールが志穂の心に少しだけ明かりを灯し、千絵に何もしてやれなかった自分に感じた怨嗟の気持ちを解きほぐした。

差出はchhie@.....

『ありがとう、シホ。 b y e b y e
』

エピソード（後書き）

最後まで読んでいただいた方々には、大変感謝いたします。有難う御座いました。

奥津城（おくつき）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5130b/>

奥津城（おくつき）

2009年3月11日13時52分発行